

碁源——天授の盤上遊戯・人智競技（1）

夏 剛 ・ 夏 冰

「拳棋不定」——最古の記述の示唆

囲碁の歴史は、4千年と称す向きが多く、3千年説や5千年説も散見されるが、特定する事は到底出来ない。但し、少なくとも2千5百年余り前に、囲碁は最早確立していたに間違い無い。

古代の歴史の確証は大体、現存し且つ信頼できる文献・遺物に限る。例えば、中国の歴史は神話や伝説を含めて、4千年とも5千年とも言われるが、「有文字可考的」（文字に由る裏付けが有る）歴史は4千年に近いとされる¹⁾。19世紀末から河南省安陽市小屯村の殷墟で出土した商朝（紀元前1600～前1046）の甲骨文（亀甲・獣骨等に刻まれた中国最古の体系的な文字）が、証拠として世界文化遺産（2006年登録）の殷墟と共に名高い。商の殷（今の安陽）への遷都（前1300）後の前1350年頃の甲骨文を起点とすれば、最低でも3360年以上の歴史は確実に存在する。

囲碁の歴史の最古級の物証として、中国の前漢（西漢、前202～後8）の皇帝（劉啓、前188～前141、前157～前141在位）の陵から出土した陶製碁盤の断片が有る。2002年に陝西省咸陽市でこの発見を遂げた考古学者は、皇族が用いた物ではなく、墓守の遊戯の為に使われていた、と推定する。²⁾ 身分の低い人までが楽しんでいたので、碁の出現は遥かに前の事であろうと考えられる。

囲碁に関する最古の記述は、『春秋左氏伝』の「襄公二十五年」篇に見える。春秋時代（前770～前476）の魯襄公25年（前548）から、今や優に2千5百年を超している。中国の歴史は文字で証明された年数より途轍も無く長いと同様に、囲碁の誕生は対局の話を経た文献の可也大昔のはずで、故に3千年説は大雑把ながら信憑性が有ろう。

魯国（前11世紀～前256）の太史（記録を司った史官）左丘明（生歿年不詳）著とされる『左伝』は、「春秋三伝」（『春秋』の3種の注釈書）の中で特に有名である。孔子（前551～前479、思想家・教育家）の添削に由ると伝えられた『春秋』は、魯の隠公元年～哀公14

年（前 722～前 481）の年代記（前 480 頃成立）で、五經（儒教で尊ばれる 5 種の經典）に入る同書の最も優れた注釈書は記録の権威度が高い。

君子之行，思其終也，思其復也。『書』曰：「慎始而敬終，終以不困。』『詩』曰：「夙夜匪解，以事一人。」今，寧子視君，不如弈棋，其何以免乎。弈者拳棋不定，不勝其耦，而況置君而弗定乎。（君子の行いは、其の終りを思う也、其の復びするを思う也。『書』に曰く、「始めを慎みて終りを敬すれば、終り以て困しまず。』『詩』に曰く、「夙夜解らず、以て一人に事う。」今、寧子は君を視ること、弈棋に如かず、其れ何を以て免れん乎。弈者も棋を挙げて定まらずんば、其の耦に勝てず。而るを況んや君を置きて定まらざる乎。）³⁾

衛國（前 11 世紀～前 209）の卿（最上級の臣）寧喜（寧悼子、?～前 546）の為政に就いて、大夫（卿に次ぐ重臣）太叔文子（大叔儀，生歿年不詳）が古訓と棋理に依って斯く異論を唱えた。囲碁に関する最初の記載は権力中枢の事象であるが、中国最古の經典『書經』（別名『尚書』）は堯・舜から秦（前 771?～前 206）の穆公（名は任好、?～前 621，前 659～前 621 在位）に至る古記録で、100 篇に纏めた史書は主に古代の政治に於ける君臣の模範的な言行を集めた物である。堯・舜（上古の伝説中の聖王）は囲碁の発明者とも言われるので、中国の碁は古くから「政・聖」の色彩が濃い。

同じ五經に在る『詩經』（別名『毛詩』，305 篇，撰者不詳，春秋時代に成る）は中国最古の詩集で、『書經』と同様に伝・編者の孔子が「魯頌・駉」篇の「思無邪」（思い邪無し）を引く総評の様に、気持を素直に吐露し偽り飾る所も邪念も無い純粹さが特色である。両經の題の「詩・書」は合成すれば中国語では文芸の素養・才能を表すが、後者は琴棋書画の「四芸」で碁と繋がる。手を使う 4 つの芸術（琴・囲碁・書法・絵画）は本家と日本に於いて、雅人の韻事や士君子の嗜みとして行われた。子孫の事を慮る可き「君子之行」に関する上記の『書經』『詩經』語録は、終始一貫する慎み深さや日夜君主に仕える勤勉・一途の勤めであるが、本業の堅実と余技の多彩を兼ね備えることは、儒教的な君子の理想像に合致する。

日本語の「碁を打つ」「将棋を指す」「西洋将棋を指す/行る」の使い分けと違って、中国語では盤上遊戯をする事は、「棋子」（碁石や象棋 [中国将棋]・将棋・西洋将棋の駒）を打ち下ろす意の「下棋」と言う。『左伝』の「弈棋」「弈者」の「弈」は今も文章語で囲碁と「下棋」を表すが、最古の記述に使われたこの字は囲碁の原点を示唆する。日本語の「弈」（囲碁の称）を含む「博奕」は「博打・博奕」（ばくち [バクウチの約]）の意で、財物を賭け骰子・花札・西洋骨牌等で勝負を争う事に言う。中国では日本の賭け碁・賭け将棋に当る「賭碁」も有るが、「博奕」は賭博の意味合いが薄れて、多く頭脳競技や実力競争を指す。

五經と並ぶ儒教經典の四書の内『論語』の「陽貨」篇に、「子曰：“飽食終日，無所用心，

難矣哉！不有博弈者乎？為之，猶賢乎已。”（子曰く、「飽くまで食らいて日を終え，心をもちうるところ無し，かた かな 博やなる者有らず乎。之を為すは，な お や ま ま り」）⁴⁾と有る。一日中に腹一杯食べるだけで心を働かせぬ様な困った輩よりは，や か ら シ ャ ン チ ー 骰子や碁・象棋で遊ぶ者はまだ益だ，という価値判断は賭博的な遊戯を見下す半面その知的な勝負の有益性を肯定する。古代に困碁を表し賭博の意も持つ「博弈」は，今や利益獲得の為に争う事の譬えに転義し，「ゲ ー ム」の漢訳も「ボ ウ イ ン」(又は「ト ウ イ ン」)と為る。

遊戯に関する件^{くだり}の数学的な理論は，特定の条件下の駆け引きに関する人間の行動の分析に用いられる。米国の数学者フォン・ノイマン（1903～57，ハンガリー 洪牙利生れ）と経済学者モルゲンシュテルン（1902～77，ドイツ 独逸出身）は，共著書『遊戯の理論と経済行動』（44）で経済理論に導入し，利害対立を含む複数主体の間の行動原理を遊戯の形で一般化する理論を創始した。経済・軍事の領域で有効性が認められ応用範囲が広がった学問は，チェ ス ト ラ ン ブ ゲ ー ム 西洋将棋・西洋骨牌等の室内遊戯の各側の参加者の得失に対する探求が起源で，利益の相互制約の状況下の意志決定及びその効果を研究するが，中・日両言語でそれぞれ其々同音の「ボ イ シ イ」(中国語では声調も同じの yì) が象徴する様に，困碁の代名詞の博弈・弈は利益の交易の性質を帯びる。

「対局」や「対弈」(双方があ い た い 対して盤上遊戯を行う意の中国語)の字面の通り，碁は対戦者が交互に碁石を1つずつ盤上に並べ，地を多く占めた方が勝ちと為る競技で，対等の権利を行使する着手はひ が 彼我の消長・こう ぼう 興亡に関する意志決定の結果にほかならない。優位を争奪する攻防は人間社会の利害しょう とつ 衝突の究極の形態を為す戦争にも似通い，博弈の「博」は同音(中国語 = b6)の「搏」の搏撃(格闘)の意も含み博打の「打」と通じる。博弈・博打の要素に有る賭博の「賭」の部首は世界最古の通貨で，殷商時代に使用された子安貝(宝貝)が貝幣の始まりとされる。貝偏の漢字は「財貨」「賣買」「贈賄」等の様に金銭・経済活動等を表すのが多く，リス ク お か リ ダ ン 博奕も危険性を冒して見返りを求める投資や投機の様な性格が有る。

困碁は交戦の抗争と交易の取引の両面を持ち合せ，衝突と並行する駆け引きを言う中国語の「闘智」は，智力格闘の本質・様相を字面に現している。困碁は手で相対し言葉を交す必要が無い「手談」(異称)であるが，「交易」と「手」で組み合わされた中国語の「交手」(組み合せて闘う)と「易手」(持主が変る)は，かん か ま じ いく さ じょう と 干戈を交える戦と奪取・讓渡に由る地の占有者の入れ替りには ま 当て嵌る。五経で『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の前に出る『易経』(『周易』又は『易』と称す)は，英訳題 *The Book of Changes* (変易の書)の通り変易の可能性を説く經書であるが，キー ワ ード 鍵言葉の2字を含む「ボ イ シ イ」と「ボ イ シ イ」(変り易い)は困碁の魅力・魔力の1つである。

『易経』は夏(前2070～前1600)の『連山』と殷の『帰藏』に次ぐ周(前1046～前256)の『周易』で，「三易」中の唯一今伝わるこの經典は中国思想の源頭・元祖と言って可い。伏羲氏(古伝説上の3皇の1人)が画した卦に就いて，周の始祖の文王(姓は姫，名は昌，生歿年不詳，在位50年)が総説「卦辞」を成し，周公(文王の子，生歿年不詳，前1043～前1037 摂政)

が「爻辞」で六爻を細解し、孔子が理論を付して「十翼」を作ったとされる。儒家が占術を取り入れて思辯を展開した典籍の理念体系は、陰・陽2元を以て天地間・人間（世間）の森羅万象を解釈し行方を予言する。碁石の黒・白2色は着手順まで陰・陽と符合し、碁盤の361の目は1年の日数に近い。真ん中の天元を除く部分の4等分も四季・四方と結び付ければ興味深い、碁碁は自然・社会の縮図・表徴の側面を持つ。

書家・書道史家の石川九揚（1945～）は『二重言語国家・日本』（日本放送出版協会、1999）の中で、中国語で頂点に在り核心を為す政治語・思想語は日本語では稀薄であると指摘した⁵⁾が、『左伝』の記載を始めとする四書五経との関連が示す様に、中国の碁碁は発祥期から儒教や陰陽原理の影響によって左様な高次元の哲理を内包して来た。「弈棋」の初出の前篇の「襄公二十四年」に、「大上有立德，其次有立功，其次有立言，雖久不廢，此之謂不朽。」（大上は徳を立つる有り，其の次は功を立つる有り，其の次は言を立つる有り。久しと雖も廢せず，此を之不朽と謂う）と有る。「三不朽」願望が求める社会的な評価と歴史的な名声は碁碁の発展の駆動力でもあるが、襄公25年の史実に出た四字熟語は碁碁の初「立言」（教訓的な言葉を残すこと）に当る。

主君を碁碁にも劣る様に扱ふ擧子はどうして禍から逃れようかと太叔父子は喝破したが、碁を打つ者でも石を手にして何処に置か決らないと相手に勝てず、況して主君を立てても固定せず変えたりするのは乱を免れない、という盤上遊戯の心得に見立てた国政運営の心構えにも基づく。「擧棋不定」は後に事を運ぶのに躊躇って定まらない様の比喩と為っているが、碁碁関連の成語第1号は対局や人生に於ける判断力・決断力の大切さを思わせる。中国の碁碁人（棋士と愛好者）はこの古訓の影響も有って、石を持った儘に着手が決らぬ様は恰好が悪いと認識し、迷いを断ち切り或いは自信不足を悟られない為にも、決めてから始めて石を手にするのが規範である。

中国の碁碁界は日中碁碁交流戦（1960～92）の初期に両国の規則・作法の違いを実感し、「擧棋不定」の振る舞いに対する日本の寛容にも文化的な懸隔を覚えた。第4次（1965）訪中使節団員の木谷禮子四段（1939～96，68年六段〔現役時代の最終段位，日本棋院〕，歿後追贈七段⁶⁾）が極端の例に挙げられるが、石を撮んだ儘に盤側で振子の往復運動の様に手を十数回も這わせてから打ち下ろすという、思考のリズムを作る為かと思われる独特な流儀は奇異に映った。⁷⁾聶衛平（1952～，82年九段〔中国碁碁協会，初代3人中の筆頭〕）は『我的碁碁之路』（我が碁碁の道，薛至誠整理〔構成〕，〔成都〕⁸⁾ 蜀蓉棋芸出版社，87）の冒頭で、石田芳夫（1948～，74年九段推挙）との対局（76.4.19，日本棋院）を振り返って、相手は自分の布石（中盤戦に向けて要所に石を配置する序盤戦。又，序盤の石配り）を意外と感じたらしく何回か碁碁器から石を撮んでは又戻したと記している。長考の末に激戦回避の譲歩を選んだ石田本因坊は主導権を奪われて最後に7目負けと為り，⁹⁾石を手にしなから打ち方に迷う者は勝ち難いとい

う古賢の論断は図らずも証明された。

第3次(1963)訪中団の33勝19敗1持碁(持と為った引き分けの碁)は、第1次の32勝2敗1持碁、第2次(61)の34勝5敗1持碁と比べれば遜色(そんしよく)が有るが、杉内雅男団長(1920~2017, 59年九段)の11-0は空前絶後の2桁対戦全勝である。中国の王幼宸(1892~1984, 64年四段[初代, 最高の五段4人に次ぐ13人中8位])は、第2・4回(58・60)全国囲碁個人賽(囲碁個人戦)2位を獲得し、第1次日本使節団を迎撃する際に定先(下手[段・級位の低い方の者])が常に黒を持ち先に打つ手合割(てあひわり)[対局者の技量差を埋める為の対局条件]・込込(ゴミ)(有利な順番に課せられる数日出しの負担条件)無しで瀬越憲作団長(1889~1972, 42年八段推挙, 55年退役・名誉九段)に勝った。3年前に中国に貴重な1勝を齎した彼は同じ先(定先)で杉内に挑む対局に於いて、緊張の余り震える手で撮んだ石を中々打ち下ろせず、秒読み中の劫争い(劫[1目を双方で交互に取り得る形の場合, 取られた後に直ぐ取り返す事が出来ない決りの為, 劫打[他の急所に打つこと])をして、相手がそれに応じれば1目を取り返す応酬(しゅう)。又、その繰り返し]を争うこと)で損を重ね続け終いに自信喪失(おおい)に陥った。10)

対照的に、趙治勲(1956~ , 81年九段)が国際戦で中国側を驚かせた打ち方は、1分碁の最後の10秒を読まれる中で手を大体見当が付いた局地の上方を小幅に旋回させ、秒読み発声の「30秒(最初の秒読み)……40秒……50秒」に次いで、「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8」とまで告げられた瞬間(しゆん)に始めて石を盤上に置く、という並々なぬ度胸(なみなぬきよう)が要る流儀(スタイル)である。彼は2015年7月11日に日本の選手権獲得総数最多記録(74回)を作った後、曹薫鉉(1953~ , 82年韓国棋院九段)と手を合せる韓国現代囲碁70周年記念特別対局(首爾, 7.26)で、秒読みに追われる状況の大変さを現す様に不意な時間切れ負けと為った。国内棋戦優勝総数が世界最多(趙の略2倍)の曹は足早な「燕流」が得意で、早見え早打ちの特徴も加えて中国で「快槍」(鋭いな槍[やり])「速射銃」の両義と呼ばれる。第8回農心辛拉面杯世界囲碁最強戦(韓・日・中団体勝抜戦)第2局(2006.9.13, 北京)の先鋒対決で、相手の羽根直樹(1976~ , 02年九段)は度重なる長考で1時間の持ち時間を使い切った後、白86からの秒読みで殆ど毎回の様に58秒の時点で落ち着き払って石を打ち下ろした。曹は白76を見て何回も盤面へ伸ばした手を引っ込めて考え直し、竿を下ろしては上げる動作に因んで中国で俗に「釣魚」(魚釣り)と言う仕草(しぐさ)は、自身が秒読みに入った後もっと頻繁(ひんぱん)になり、手付(つき)に映る心の揺れ動きの影響も有ったのか形勢が逆転し、276手完・半目(最小差)負けに終わった。11)

孫武(春秋末期の呉[?~前473]の兵法家, 生歿年不詳)著『孫子兵法』の「謀攻篇」に、「知彼知己者, 百戦不殆。不知彼而知己, 一勝一負。不知彼不知己, 每戦必殆。」(彼を知り己を知る者は, 百戦して殆うからず。彼を知らずして己を知れば, 一勝一負す。彼を知らず己を知らざれば, 戦う毎に必ず殆うし)と有る。中国の兵法書の始祖と為るの13篇中の第3の篇名は、図らずも囲碁の智謀・「圍攻」(圍い攻め)と重なり合うが、棋戦で殆ど死線(デッドライン)に触れる

寸前まで考え続ける事は「殆」の意に有る危険を大いに孕む。極限まで最善手を捜す趙治勲の求道派の姿は内外で感心されているが、快刀乱麻を断つ様な捌きが難しい複雑な局面では決断し難い場合が多いから、彼や曹薫鉉の様な世界頂上級の棋豪でも「拳棋不定」の時が有るわけである。ゲーテ（1749～1832, 独逸の詩人・作家・劇作家）の劇詩『ファウスト』（1774～1831）の「前口上」中の「天上の序曲」に、「人間は努力する限り迷うものだ」という名言が有るが、囲碁の対戦は自らの宿命的な迷いと闘いでもある。

藤沢秀行（本名保, 1925～2009, 63年九段）は『碁打ち一代』（読売新聞社, 81）第14章「強くなるために」の中で、非専門家の対局中の態度や作法に就いて色々^{いろいろ}と忠告し、その1つが「石を手にするのは、考えがまとまってからにしたい」である。「昔、私の院生時代、碁笥^{こけ}に手を突っ込んで三省せよ、と言った先生がいる。打とう、と思って碁笥に手を入れても三回考え直せ、というわけだが、それぐらい慎重になれ、という心構えとしての話ならわかるが、実際にはやってはいけないと思う。私の場合、碁笥を手に入れたときは、打つと決心したときだ。それだからポカが多いのかもしれないが、そういう信条だから、相手が石を握った場合も、どこに来るか、と瞬間気合を入れる。それを二度も三度も繰り返されたのでは気合が抜けてしまう」と説くが、『論語』「学而」篇の「三省」の引用と誤用は日本に於ける儒教の影響と変容を映し出す。

「曾子曰：“吾日三省吾身——為人謀而不忠乎？與朋友交而不信乎？伝不習乎？”」（曾子曰く、「吾日に三たび吾が身を省みる。人の為^{ため}に謀^{はか}りて忠ならざる乎、朋友と交わりて信ならざる乎、習わざるを伝うる乎。）」日々3度（幾度と無く）自省を行う「三省」は品性修養の為の定例点検であり、その悠長な「立德」作業よりも「三思」の「立功」要領の方が緊迫した勝負事に適する。「公冶長」篇の「季文子三思而後行。子聞之曰：“再、斯可矣。”」（季文子、3たび思^しいて而る後^{のち}に行^なる。子、之^{これ}を聞^ききて曰^いく、「再^{また}びせば、斯^{これ}可^{なり}矣。）」から、深く思案する慎重さを勧める「三思而（後）行」は中国で成語^{せいご}に為っている。2度考えれば可^よいと言うのは『論語』「先進」に見える孔子の「過猶不及」（過^すぎたるは猶^{なほ}及^おばざるが如^{ごと}し）と通じ、囲碁でも過^すぎに由^よって迷^まいや悪手^{あくて}が出る事は珍^{めづ}しくないが、「再、斯可矣」が一般化しなかったのは孔子一門が強調した用心深^{じん}さの所^せ為^いかも知れない。孔子の弟子で後に「宗聖」として尊^たばれた曾子（曾參 [前 505～前 436] の敬称）は、『詩経』「小雅・小旻」の「戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷。」（戰戰兢兢として、深淵に臨^{のぞ}むが如^{ごと}く、薄氷を履^{ほくひょう}むが如^{ごと}し）を門人に言^いい聞^きかせた（『論語』「泰伯」）が、日本語の成句とも為ったこの警句は囲碁人にも有益である。

「澄心精慮 / 薫和」——名家の書・号の寓意

藤沢秀行は監修を務めた聶衛平回顧録の日本語版（田畑光永訳『私の囲碁の道』、岩波書店、1988）の序文「中国の碁、聶さんの碁」第6節「日本の碁界は変わる」で、第1～3回日中スー

パー囲碁 (中国側の名称 = 中日囲棋擂台賽 [囲碁勝抜戦], 84.10.6~87.3.14) に於いて、自分と小林光一 (1952~ , 78年九段)・加藤正夫 (1947~2004, 78年九段)・武宮正樹 (1951~ , 77年九段)・大竹英雄 (1942~ , 70年九段) 等の一流陣が轡を並べて敗れた事に就いて、「日本の碁打ちは惰眠をむさぼり続けてきた。もうそんなわけにはいかない。春秋の筆法をもってすれば、聶さんが碁打ちの目をさまし、聶さんの存在が日本の碁を再生させるかもしれないのだ」と書いた。中国語の「春秋筆法」は孔子改編の『春秋』の字句が毀誉褒貶の意を含むことから、屈折した表現に褒貶を込める手法に言い、日本語のこの輸入熟語は『春秋』の様に批判の態度が中正で厳しい等を表すが、秀行の言い回しは囲碁の最古の記載が出た『春秋左氏伝』と奇妙に通じる。

藤沢秀行は子供の頃から『三国志演義』『水滸伝』『太公望』等の中国の歴史物に読み耽り、その読書傾向は生涯変らず、旅先には専ら『唐詩選』を持ち歩き細切れの時間に目を通した。¹²⁾ 三段昇進の1943年に福田正義師匠 (1899~1981, 42年六段, 78年退役七段, 追贈八段) の誘いで満州 (中国東北部) に赴いて、南満州鉄道株式会社・政府の職員や軍人を相手に普及・指導を10ヵ月行い、青春時代に大好きな中国で自由時間を利用して勉強した事は血と為り肉と為った。自分の実力が分らず何かで打開していかねばと焦っていた状況で、道を開こうと考えて漢詩を貪る様に読み座禅を組む修行にも精を出した。¹³⁾ 詩書に親しむ彼は書道で表現する為に面白そうな漢字を書き溜めて、数年置きに開く個展の前にこれを組み合わせて造語したりしながら書いて行った。書家柳田泰雲 (本名伊秀, 1902~90) から「高僧の名筆に匹敵する“味”が有る」と褒められた字で、1994年に厳島神社の依頼で1400年祭に大絵馬に「磊磊」を書いて奉納した。¹⁴⁾ 広島県廿日市市宮島に在る日本三景の1つは国宝・世界遺産 (1996年登録) であり、天下の棋士中の屈指の能書家の秀作を飾るのは粋な計らいと言える。彼は坂井秀至 (1973~ , 2010年関西棋院八段) にこの2字の書を贈って、大きくゆったりとした打ち手に成って欲しいという期待を託した¹⁵⁾ が、四芸中の碁・書の結合の妙用は漢字を媒体とする点で碁の由来・理念を示唆する。

日本碁史上の最高の黄金期が終盤に差し掛った1980~84年、20世紀の高手の打碁集『現代囲碁大系』(編集主幹 = 林裕, 監修 = 橋本宇太郎・呉清源・高川格・藤沢朋斎・坂田栄男・藤沢秀行・林海峯・大竹英雄, 全47巻+別巻1) が、収録対象の「高段者」(五段以上) と同音の講談社より出版された。独りで1~2巻を占める場合は巻頭の写真頁に殆ど揮毫が掲げてあり、掲載順で「澄心精慮/薫和」「風洗雨磨/橋本宇太郎」「仁風/木谷實」「半局残棋看古今/呉清源」「萬古清風/九段 島村俊宏書」「道がある人はあるく 道がつゞく 人はあるきつゞける/名誉本因坊 秀格」「道/藤澤朋斎」「幽玄/名人 本因坊栄寿」「神授之一手/杉内雅男書」「石心/九段 梶原武雄」「無悟/棋聖 秀行」「玄妙/大平修三」「守拙/橋本昌二」「無心/林海峯」「石心/名人 大竹英雄」「遊神/石田芳夫」「歆/加藤正夫」「致爽/武宮正樹」「玄妙/十段 小林光一」

「山窓無月一燈明/棋聖 趙治勲」と為る。4人が「心」を使い「石心」「玄」「古」「風」が2回出たのは発想の近似を思わせ、秀格即ち高川格(1915~86, 60年九段)の平仮名多用は日本的な「流水不争先」(流水先を争わず)の棋風に似合う。山部俊郎(1926~2000, 63年九段)の巻に欠落した例外は、自らを語らず表に出さぬ内気や顔が鑑賞に値せぬとする信念に基づく写真嫌い¹⁶⁾と通じる。複数入りの巻での収録は第2巻『明治・大正名棋家二』(渡辺昇吉・窪内秀知・渡辺英夫・酒井康雄解説, 中島宏二執筆, 1980)の「有清韻/雁金準一書」しか無いが、日本棋院で販売する棋士揮毫の扇子が原則的に3大選手権経験者に限ると同じく、棋士の書の公刊は名誉な特権に近く漢字の重みを感じさせる。

単独で1~2巻を為した名棋士は全て20世紀生れで、年齢順で最初に出るのは第5巻(本人解説, 高橋敬光執筆, 1981)の岩本薫(1902~97, 67年九段)である。「澄心精慮」の署名「薫和」は第3~4期本因坊(1946.8.21~50.4.28在位)の雅号で、第7~15期の秀格(同54.8.21~61.6.17)から奪冠(中国語, =栄冠を奪取)した坂田栄男(1920~2010, 55年九段)は、「栄寿」の雅号で先達の9連覇に次ぐ7連覇を果たした。第23~25, 38~39期(1968.6.28~71.6.22, 83.7.28~85.6.27)の林海峰(1942~, 67年九段)は実名を号とし、その最年少獲得記録を更新し5期連続保持した石田芳夫は、弟弟子加藤正夫の義父である書家佐々木泰南(本名憲二, 1909~98)の命名で「秀芳」を雅号とした¹⁷⁾。新覇者の武宮正樹は当初(第31期, 1976.7.16~77.6.30)「秀樹」を名乗ったが、復位(第35期, 80.7.4~81.5.27)後は「正樹」に改め第40~43期(85.6.27~89.6.16)に至った。第32~34, 57期(2002.7.11~03.7.11)の加藤は就位式(1977.8.23)で号「劔正」を披露し、初戴冠の翌月に「秀芳」の名付け親の四女泉(1955~)と結婚した事も、「碁縁」(造語, =碁で結ぶ縁, 囲碁所縁の関り)を感じさせた巡り合せである。その後の日本人本因坊の場合は、第60~62期(05.7.12~08.7.23)の高尾紳路(1976~, 05年九段)は「秀紳」と決め、第63~64期の羽根直樹は奪取の直後に、実力・実績が伴っていないとして雅号を名乗らない考えを表明した¹⁸⁾。第65~66期(2010.6.29~12.7.19)の山下敬吾(1978~, 03年九段)は「道吾」と命名し、以降7連覇中の井山祐太(1989~, 09年九段)は号を「文裕」とした。実力制第1期(1941.7.18~43.9.7)の関山利一六段(1909~70, 58年関西棋院九段推挙)が号した「利仙」以来、世界最古の制度化した最高位名に相応しい風雅な称号は現代碁史を彩って来たが、「二重言語国家」らしい漢字優位の趣向は囲碁の根底を為す漢字文化の発露と思える。

史上最多の通算獲得・連覇を記録した趙治勲(第36~37, 44~53期)は、中国出身の林海峰と同じく実名を号としたが、1999年7月6日にその10連覇を止めた同胞の趙善津(1970~ , 98年九段)も、第55~56期の王銘琬(1961~ , 92年九段)と第58~59期の張栩(名は通読「う」, 1980~ , 03年九段)も、号を名乗らなかった。高尾紳路は関係者から勧められても時期尚早として固辞し¹⁹⁾3連覇達成後に初めて名乗り、井山裕太も5連覇に由る名誉

称号の獲得を機に名乗ったので、1～2期では未だ及ばないという平成の名棋士たちの謙讓精神が感じられる。羽根直樹は本因坊獲得の前に棋聖2期(第28～29期, 2004.3.18～06.2.23), 天元3期(第27～29期, 01.12.5～04.11.26), 第11期阿含・桐山杯全日本早碁オープン戦優勝(04.10.9), 第53期(05年度)NHK杯テレビ囲碁トーナメント優勝(06.3.5放映), 日本棋院賞金序列^{ランキング}2位(04～05年), 第4回春蘭杯世界囲碁選手権戦(主催国[中国]言語の表記は「春蘭杯世界囲碁職業錦標賽」)準優勝(03.3.18)等の良績を取っていた。山下敬吾を破っての第28期棋聖奪取の3連勝→3連敗後の到達(2004.3.18)は七番勝負史上初と為り, 高尾紳路に3連敗後4連勝しての本因坊戴冠は同史上の6例目, 林海峰・趙治勲に次ぐ3人目(日本人としては初)で, 共に「平成四天王」と称される高尾・山下に遜色の無い實力は明らかである。前・後に本因坊位を獲った2人と違って雅号を遠慮したのは尋常ならぬ謙遜であるが, 本因坊の畏敬される權威を示す美談は雅号の例が1つ減った点で残念な事でもある。書「無悟」に「棋聖 秀行」と署名した藤沢は初代棋聖(1977.2.8獲得)だけでなく, 第1期日本棋院青年選手権戦三・四段級部(48.2.25)・第1回首相杯日本棋院高段者トーナメント決勝戦(57.10.17)・第1期日本棋院第一位決定戦(59.9.29)・第1期(旧)名人戦(62.8.6)・第1期早碁選手権(69.4.27)・第1期天元戦(76.1.8)でも優勝し、「初物喰い」の実績は初代名誉棋聖(83.3.17まで6連覇)をも含む。7大棋戦時代(棋聖戦・天元戦創設の1976年より)の最高位(棋聖)6期, 名人(旧名人戦時代の同じ實力制の本因坊を凌ぐ最高位)2期(第9期70.10.17復位), 王座5期(第15～17期[67.10.19～70.11.13], 第39～40期[91.10.28～93.11.4])の半面, 本因坊戦では挑戦2回(60・66年に高川格・坂田栄男に敗退)に止まったが, 彼が本因坊に成り雅号を付ける事が出来たなら, 中国語所縁の音読みの主流に沿う「秀行」以外は考え難い。

戸籍上「ひでゆき」と読む藤沢秀行の名は碁界で「しゅうこう」が通称と為り, 綽名「福島」の猛牛^{みやしたひでひろ}の宮下秀洋(1913～76, 60年九段)の名も「しゅうよう」と呼ばれた。後者は入段(1930)後の32年二段→34年三段→35年四段と, 44年昇進後の高段時代の48年六段→49年七段→53年八段が「牛蒡抜き昇段」と喧伝され, 日本棋院の5番目(推挙・追贈者は除く)の九段と力戦の猛者の名声が高い半面, 戦後には株や相場に熱中し²⁰⁾日本一酒癖が悪いと評された²¹⁾型破れの性格も語り種に為る。酒・賭け・女に屢々溺れる「無頼派」秀行も音読みの語感と合う雄々しさが突出し, 賭博・碁に熱心な相場師の父親から博奕の勝負事・賭け事の両面の素質を引き継いだ彼は, 人生の転換点と為る満州行の1943年に本名「保」を「秀行」に改めたが, より強そうな名前だと考えた²²⁾のは江戸時代(1603～1868)の強豪に肖る意味も有る。大正^{たいしょう}(1912～26)の新鋭小岸壯二(1898～1924, 病没の前日[1.6]秀哉師の配慮に由り六段昇進)も, 子供の頃「秀立」の号(秀哉+頭山満[1855～1944, 右翼の巨頭]の号「立雲」)を作って秀哉^{ひど}に酷く叱られ, 21年の五段昇進で坊門の後継者として認められた後に再び復活させた²³⁾が, 近世～戦前の本因坊等の名に「秀」が多いのは天下を取る気構えの現れと見ら

れる²⁴⁾。上記の12の雅号中「秀」+名前の1字の「秀格」「秀芳」「秀樹」「秀紳」が1/3を占め、内「秀紳」の「秀」は歴代本因坊所縁^{ゆかり}の字で命名者の秀行師匠への敬意の表れにも為る²⁵⁾が、当の藤沢は好きな棋士として「天保四傑」中の太田雄蔵(初の名は川原卯之助、後に良輔^{りょうすけ}と改め、更に太田姓を名乗り雄蔵と称す、1807~56, 48年七段上手)・村瀬秀甫(幼名彌吉^{やきち}, 1838~86, 十八世本因坊・八段準名人[86年襲位・允許^{しゅういん}]・水谷縫治(1846~84, 82年六段, 追贈七段)を挙げ²⁶⁾、「名人中の名人」と謳われた秀栄(本名土屋平次郎, 1852~1907, 十七・十九世本因坊[84~86, 88年再襲]及び家元制林家の林十三世[1864~84], 名人・九段[06])を古来最強級と位置付けた²⁷⁾。高川格は内弟子時代に光原伊太郎師(1897~1979, 48年七段, 61年名誉八段)師の薦めで秀栄打碁集を並べており²⁸⁾、本因坊家伝統の「秀」の字を頂戴^{たいだい}すると共に尊敬する秀栄名人を意識したという述懐^{じゆつかい}²⁹⁾の様に、厚味の中に底知れぬ力を秘めたその棋風が理想像と為るから雅号中の「秀」は必然性が有る。坂田栄男は修行時代に他流試合^{じあい}の実戦で腕を磨き棋譜並べの勉強を余りしなかった³⁰⁾ので、「栄寿」の「寿」は秀哉(1874~1940, 08年二十一世本因坊, 14年名人)の本名田村保寿と時の日本棋院総裁(第2代, 1955~67)津島壽一(1888~1967, 官僚出身の政治家)から取ったのに対して、「栄」は秀栄所縁^{ゆかり}でなく自分の名から取ったと思われるが、実力制名人本因坊第1号と成る実力と芸は秀栄並みと言えよう。関山利一の日本棋院時代の愛称「仙ちゃん」は仙人じみた風貌に因む節も有るが、本因坊雅号「利仙」はその深層の理由と通じて、「囲碁四哲」中の安井仙知(入門時に中野知得^{なかのちとく}, 1776~1838, 家元制安井家の八世安井仙知・八段準名人[14年襲位・昇進]への傾倒に由来した。³¹⁾

世界囲碁史の第1・2の黄金期は日本の江戸・昭和(1926~89)の1強独走に他ならず、第3の黄金期は世界戦(88~)・人工^{A I}智能^I参入(2016~)の多極隆盛である。江戸の頂点を代表する3人の棋聖^{げんろく}は元禄(1688~1704)の道策(本姓山崎, 幼名三次郎, 1645~1702, 四世本因坊・名人碁所^{どころ}・九段[77~02]), 天保(1831~45)の丈和(本姓戸谷, 後に葛野, 1787~1847, 27年七段上手, 十二世本因坊[27~39]襲位翌年八段準名人, 31年名人碁所[38年返上]), 嘉永(1848~55)の秀策(俗姓桑原, 幼名虎次郎, 1829~62, 48年本因坊跡目・六段)である。「前聖」道策は本因坊道吾の「道」に山下敬吾の出身地の北海道と共にその雅号に込められ,³²⁾「後聖」丈和・秀策の「和」と「秀」は薫和と秀格・秀芳・秀樹・秀紳に含まれる。江戸時代の初年に日海(本姓加納, 幼名興三郎, 1559~1623, 京都寂光院の僧)が初代(本因坊算砂, 一世名人[12~23])を名乗って³³⁾以来、本因坊は家元世襲制が綿々と続き1939年に選手権戦^{タイトル}の発足で実力制に移行した。西洋の「罪の文化」や日本の「恥の文化」と異なる中国の「名の文化」は日本にも影響を与えたが、中国の思想・文化・文学等に親しむ気風が明治(1868~1912)の「脱亜入欧」で薄れた後も、碁界では大昔の名家の栄光の名残は本因坊の名・号の漢字の共通^{とど}に由って留めてある。

「劔正」は地元の有力支援者劔木亨弘（1901～92、参議院議員・文部大臣等歴任）と加藤正夫の名前から1字取り³⁴⁾、「文裕」は智慧を授ける文殊菩薩と井山祐太の名前から1字ずつ取り³⁵⁾、「正樹」は武宮本因坊の実名の漢字表記である。何れも江戸碁界四家（本因坊・安井・井上・林）の家元の通称に無い字であるが、武宮は当初本因坊家の十四世から世襲制最後の二十一世まで全て冠した「秀」と本名中の「樹」の組み合わせを採用し、自分の名は湯川秀樹博士（1907～81、理論物理学者、49年ノーベル物理学賞受賞）に肖ったものだが、この度「秀樹」を号とし本因坊の名前を辱めない様にした、と初の就位式（76.8.17）で述べた³⁶⁾。名に恥じぬ決意・実績で囲碁人の栄光を生み又保つ「名・恥」の複合文化を発揚した彼は、平成版『道策全集』（小林光一・岩本薫監修、全4巻+別巻、日本棋院、1991）の猛勉強の甲斐が有って、第30期十段戦五番勝負（92.3.5～4.16）で道策に心酔した小林光一3冠を3-1で撃退した³⁷⁾が、井山は秀策・丈和・秀和（幼名土屋俊平、後に恒太郎・秀和、1820～73、47年十四世本因坊、50年八段準名人）の棋譜を能く並べ³⁸⁾、本因坊本山（算砂の出身場所）寂光寺の第33代住職大川定信（1943～）に名付けて貰った³⁹⁾。12の雅号の中で音読み+訓読みの「道吾」を除いて全て音読みで、「薫和」「秀芳」「秀樹」「正樹」の様に実名で訓読みと為る字も音読みに直されている。

道策・秀策の「策」と丈和・秀和師弟の「和」は名家・名門の系譜の表徴と見做せ、同時代の秀策と共有する秀和の「秀」は、長男秀悦（1850～90、十五世本因坊・六段 [73～79]）・次男秀栄・三男秀元（本名土屋百三郎、1854～1917、十六・十八世本因坊 [79～84、07～08]、四段 [襲位時]・六段 [再襲時]）に継がれた。「薫和」の「和」は丈和・秀和と繋がり「昭宇」と「昭和」を合成する妙味が有るが、「和」が相応しいという考えを導いた助言者下村海南⁴⁰⁾（本名宏、1875～1957）は、明治～昭和の官僚・新聞人・政治家・歌人で、昭和天皇（名は裕仁、1901～89）の「大東亜戦争終結ノ詔書」（45.8.14）の肉声録音を流す「玉音放送」（翌日）の際、國務相兼内閣情報局総裁として本放送の前後に言葉を述べた人物である。一足早く本因坊の座に就いた橋本宇太郎の雅号の「昭」は激動の昭和の烙印と捉え得、「宇」は自分の名前と共に太平洋戦争（1941.12.7 勃発）中の「八紘一字」の標語を想起させる。日本の海外進出を正当化するこの和製熟語は世界を1つにする意で、「八紘」（四方と四隅、地の果て、転じて天下、全世界）も「一字」（1つの屋根）も氣宇壮大である。「八紘」の典故『淮南子』（「地形訓」篇）は前漢の淮安王劉安（前179～前122）及び門人等が著した雑家の書（別称『淮南鴻烈』）で、道家の説を中心に周末以来の儒家・法家・陰陽五行等の思想を導入し、治乱・興亡等の事績を記し宇宙生成論等の学説・理念を打ち出すが、政治思想・宇宙情念を頂点に据えた漢籍と中国語は、日本で形而上的な言説を覆う（纏める）巨大な「宇」に為る。

日本の公式の年号は最初の「大化」（645～50）から漢字2字が絶対多数であり、5連続の4字元号（「天平感宝」「天平勝宝」「天平宝字」「天平神護」「神護景雲」）[其々 749.5.4, 同 8.19,

56.9.6, 65.2.1, 67.9.13 改元]) も含めて, 「平成」まで 247 を数える元号は例外無く漢籍に出典が見当る。⁴¹⁾ 『釈日本紀』(『日本書紀』[六国史の1つ。日本最古の勅撰の正史, 720 年とねりしんのう) 舎人親王等撰。神代から持統天皇 (645~703, 690~97 在位) までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録等を漢文で記述した編年体の史書, 30 卷] の注釈書。28 卷, 卜部懷賢 [鎌倉時代 (1185 頃~1333) の神道家・古典学者] 著, 鎌倉末期に成立) に蘇我入鹿 (?~645, 飛鳥時代 [592~710, 或いは 593~694] の貴族) 誅伐の後「天下安寧。政化敷行。故号元於大化-」と有る (『日本国語大辞典』第 2 版の【大化】■一の語釈に見える) が, 「大化」は『書経』「大誥」の「肆与大化誘我友邦君。」(肆に与大いに我が友邦の君を化誘か)⁴²⁾ 等の漢籍用例と通底する。年号は「朱鳥」(686) 以後暫く立てられず 701 年に「大宝」と建元し, 以来途切れる事が無く 13 世紀余り綿々と代替りの更新をして来たが, 『易経』「繫辭下」の「天地之大徳曰生, 聖人之大宝曰位。」(天地之大徳を生と曰い, 聖人之大宝を位と曰う)⁴³⁾ が出典と為るこの年号から, 由緒有る漢籍から取る格調高い漢単語を用いるのが次第に自覚的な恒例と化している。⁴⁴⁾ 森本角蔵 (1883~1953, 東京高等師範学校・実践女子大学教授) 著『日本年号大観』(目黒書店, 33) 等に拠れば, 元号の出典と為る 77 の漢籍中『書経』(36 回)・『易経』(27 回) が最も多く, 3~10 位を為す史書・詩文集には四書五経中の『詩経』(8 位, 15 回) も有る。「昭和」は『書経』「堯典」の「百姓昭明, 万邦協和。」(百姓昭明にして, 万邦を協和す) から取り, 「平成」は『書経』「地乎天成」と『史記』(歴代 9 位の 13 回)「五帝本紀」の「内平外成」に由来し, 丈和が生きた「天保」も『書経』「仲虺之誥」の「欽崇天道, 永保天命。」(欽んで天道を崇び, 永く天命を保たん) に拠るから, 四書五経等の儒教典籍や中国古来の観念・表現の影響は高い次元ほど強い感が有る。

「専心致志」——集中力・精神力の要求

四書は『大学』『中庸』(五経の内の『礼記』中の 2 篇) と『論語』『孟子』の総称で, 朱子学の尊崇によって五経と並ぶ儒学の枢要の經典とされた。中国の「程朱理学」に対応する和製概念の「朱子学」は, 北宋 (960~1126) の儒学者周敦頤 (1017~73)・程頤 (1032~85)・程頤 (1033~1107) 兄弟等に始まり, 南宋 (1127~1276) の大儒朱熹 (1130~1200) が大成した儒学の学説で, 世界を構成する気とその理 (存在根拠・法則) を軸に理気論と, 理から生れた人間の本来の性に絶対善を認める性理論を打ち立て, 不純な気質の改造に由る修身 (天理への順応と私欲の克服)・自己実現を實踐道德の課題・目標とし, これを成し遂げた傑物の執政で治国・平天下が出来ると唱えた。陰陽二気に由る万物形成説と「修己治人」(己を修めて人を治む) の主張は, 儒教及び宇宙情念と政治思想の体現に他ならない。名分・規範等の理を重んじる思想は社会の礼教化に寄与し, 元・明・清 (1271~1368, ~1644, ~1911) 3 代に亘って

体制・秩序維持の正統理念と為り、朝鮮王朝（李氏朝鮮，1392～1910）・越南と日本にも導入され、江戸時代の日本の儒学に大きな影響を与えた。儒教の祖孔子の言行及び門弟・時人等との問答を集録した『論語』は教育・政治等に渉り、「礼・仁」（理想的な秩序・道徳）を中核とする礼教（礼儀・教化）の教科書と言える。

『孟子』は孟軻（前 372～前 289，思想家）の孔子の理念に対する祖述や、遊歴中の諸侯及び弟子との対話を記録した書である。子思（名は伋，前 483～前 402，孔子の孫，曾子の弟子，哲学者）の門人に教わった孟子は、亜聖（「聖人」孔子に次ぐ賢人）と呼ばれ「孔孟之道」（孔孟の教え）で先聖と並称される。彼は諸国に遊説し性善説に基づく王道主義の治世を宣揚し採用されなかったが、第 1 篇「梁惠王章句上」第 1 節に有る「王！何必曰利？亦有仁義而已矣。」（王，何ぞ必ずしも利と曰わん，亦仁義有るのみ）⁴⁵⁾ は、「実恵」（実利）至上主義に物を申す警句として後世に遺る。「告子章句上」にその対立軸の「義・益」と同音の「弈」は『左伝』と同様「弈者」と共に出たが、棋士に関する最古の記載は囲碁所縁の四字熟語「専心致志」の由来である。

今夫弈之為数，小数也，不専心致志，則不得也。弈秋，通国之善弈者也。使弈秋誨二人弈，其一人専心致志，惟弈秋之為聽。一人雖聽之，一心以為有鴻鵠將至，思援弓繳而射之，雖與之俱学，弗若之矣。為是其智弗若與？曰：非然也。（今夫弈之數為，小数也れども，心を専らにし志を致さざれば，則ち得ざる也。弈秋は，通国之弈を善くする者也。弈秋をして二人に弈を誨えしむるに，其の一人は心を専らにし志を致し，惟弈秋に之聴くことを為す。一人は之を聴くと雖も，一心には以為えらく，鴻鵠有りて將に至らんとす，と。弓繳を援きて之を射んことを思わば，之と俱に学ぶと雖も，之に若かず。是其の智の若かざるが為與。曰く，然るには非ざる也，と。）

囲碁を「小数」（詰まらぬ技，「数」は同音 [shù] の「術」に通じる）と見るのは，博打と同列視する孔子の認識と一緒であるが，心を専一にし志を確り立てなければ会得できないと言うのは，勝負事に不可欠な集中力・精神力を必須の素質とする碁界の要求に合う。国手級の弈秋が 2 人の弟子に教えたとして，その 1 人は一筋に教えを聴き，もう 1 人は聞いてはいるが「間もなく鴻鵠が飛んで来るだろう」と思いを馳せ，矰繳の矢を引いて射てやろうと考えていたなら，一緒に学んでいたとしても前者に及ばず，それは智恵が劣るのでは専心・努力しない所為だ，という説教の喩え話は学習の法則に合致し説得力が有るが，国手級の棋士とその弟子育成の授業の登場は囲碁の競技・教育の発達を感じさせる。

日本棋院は創設（1924.7.17）の四半世紀後に戦後復興の記念として，囲碁規約制定委員会（委員長＝下村宏）作成の「日本囲碁規約」を打ち出した（49.10.2）。第 1 期本因坊戦（1939.6.21 開始）の公式名称「本因坊 名跡争奪・全日本専門棋士選手権大手合」（別名「本因坊位継承戦」）

を踏襲する様に、対外普及を念頭に置いた日本初の成文法では「専門棋士」の表現を用いるが、全日本学生本因坊決定戦4連覇（第22～25回，78～82）・世界アマチュア囲碁選手権戦日本代表決定戦優勝3回（第3・23・30回，79・2000・08）の非^{アマチュア}專業強豪金沢盛栄（1957～，毎日新聞社東京本部学芸部囲碁担当）も、『本因坊400年 手談見聞録』（毎日新聞社，16）第1章「囲碁の起源から日本棋院の設立まで」の「①囲碁のルーツ インドやチベット・ヒラヤマ説も」の冒頭で、「2012年は、初代本因坊算砂が、徳川家康から囲碁の專業棋士として俸禄を受けてから400年の節目にあたる」と書く。日本棋院関西支部の分裂・一部独立で関西棋院を立ち上げた（1950.9.2）橋本宇太郎は、『囲碁專業五十年』（至誠堂，72）の第1章「くぼまつ」の書き出しで、「多くの専門棋士がどういっかけて碁を覚えたか」と問い掛ける一方、「自序」で題名中の「囲碁專業」は十一世（井上）^{げんあんいんせき}幻庵因碩（本名不詳，旧名橋本^{いんてき}因徹・服部^{はっとりりつてつ}立徹・井上^{あんせつ}安節，1798～1859，24年より十一世井上因碩，28年八段準名人）の言葉の借用で、「これを現代語でいうと、プロ碁打ちということであろう。プロ意識ということをよく耳にする。百五十年前、幻庵因碩はプロとしての自覚をこのことばによって表明した」と述べる。退隱（1848）後53年に交流の為の中国への渡航を試みた名家の言に一部由来しただけに、「専門棋士」と中国語の「職業棋手」の合成の様な「專業棋士」は^そ重層性と重みが有る。国民性に強い職人気質が有る日本で「職業」より「専門」「專業」で冠するのは興味深く、棋士に中国以上の専心度を要求する碁界の理念が名称に表れている。

中国では南朝（420～589）4朝中の宋（420～79）の明帝（^い劉彧，439～72，65～72在位）の支持に由り、棋士の選抜・棋譜の整理等を司る^{ゆう}圍棋州邑（史上初の^{ゆう}圍碁主管官庁）が創設された。唐（^{とう}618～907）の玄宗（李隆基，685～762，12～56在位）は開元初年（13）に皇帝直属の^{たいしやう}棋待詔制度を設け、^{ゆう}圍碁部門の待詔（^{ゆう}琴棋書画等の^{ゆう}技芸が優れて皇帝に召し出される者）には、『棋訣』3巻を遺し日本で名高い「^じ圍碁十訣」を^あ編み出した^{せいしん}伝説的な^{せいしん}王積薪（生没年不詳）、日本王子との対戦（848）を「^{ちん}鎮神頭」の^こ絶妙手で制した^こ国手顧師言（同）等が居た。^{はんじやう}愛棋家の^{はんじやう}権力者の^{はんじやう}奨励・^{はんじやう}厚遇を受けて名棋士が活躍し碁界が^{はんじやう}繁盛する現象は、江戸時代の日本や「日本^{はんじやう}圍碁規約」成立の前日に成立した中華人民共和国でも見られた。江戸（^{とくがわ}徳川）幕府（1603～1867）の初代^{いえやす}將軍家康（^{まつだいら}松平氏，^{たけちよ}幼名竹千代，^{もとやす}初名元康，1542～1616，03～05在職）は、中国の^ふ棋待詔制度発足の9世紀後に^ふ隱居中の^ふ権勢を揮って^ふ專業棋士に^ふ俸禄を提供したが、1612年の^ふ四門設立で日本碁界の^ふ独特の^ふ群雄割拠・^ふ強豪競合の局面が形成され、^ふ棋戦に必要な^ふ棋力統一基準として^ふ道策が考案した^ふ段位制は中国より3世紀も早く誕生した。中国では古代の^ふ宮廷^ふ棋士の他に^ふ民間の^ふ高手も^ふ明・清に^ふ輩出したが、^ふ近代的な意味の^ふ專業棋士制度は1982年3月17日に^ふ漸く^ふ正式に始まった。

日本の^{プロ}專業棋士誕生の19世紀以上も前に中国では^{プロ}国手級の^{プロ}棋士が登場したが、「^{プロ}拳^{プロ}棋不^{プロ}定」の^{プロ}決断力の^{プロ}欠如を^{プロ}戒める『左伝』に対して、『孟子』は「^{プロ}専^{プロ}心致^{プロ}志」の^{プロ}集中力の^{プロ}保持を

勤める。対局中の集中力の低下が一瞬なりとも命取りに為りかねない事は枚挙に暇が無いが、損失と悔恨が甚だしい例として昭和中～後期の最強級の坂田栄男の2回の自滅が有る。七段時代の第6期本因坊戦決勝第7局(1951.6.27～28, 三重県賢島「賢島観光ホテル」)で、白130の妙手を放って本因坊昭宇を苦境に追い詰めた時、「我勝てり」と胸が躍り本因坊に成った時の雅号を考え始めたが、心の僅かな隙に悪魔に付け込まれ逆転負けを喫した。馬鹿に嬉しくなると就位後の自分の事が脳裏を掠めたのは修行不足と甘さだった、という悲痛な感想⁴⁶⁾は純粋度・集中度の「専心」の足りなさに対する反省である。石田秀芳に挑む第30期本因坊戦決勝第5局(1975.6.26～27, 千葉県成田市成田山新勝寺)でも、彼は2目勝ちの優勢を保ち考慮時間が20数分も有った寄せ(終盤戦。詰め寄せて勝負を決める収束)の段階で白204の飛んだ大失着を打ち、折角角番(所定の複数局で勝負を争う場合、負け越している側から見て後1敗すれば負けが決定する対局)に追い込んだ相手の逆転勝ち(213手完、黒中押[途中で押し切る/押し切られる形で、一方が挽回不能と見て負けを認め、双方の地を数え合うこと無く終局と為る]勝ち)を許した。心理面の負の連鎖を断ち切れず第6・7局の連敗を招いた痛恨の頓挫の誘因は、親しい小説家の江崎誠致(1922～2001)の予期せぬ入室に気を取られた事である。2日目に観戦者を入れない規則に抵触する有るまじき奇禍で、彼は瞬時集中力を失い手拍子の様に有らぬ方面に石を置いた⁴⁷⁾が、一瞥をくれるだけで脇目運転の事故の様な転落に為りかねない困碁の魔性は真に恐ろしい。

日本語の「放心」の中国語と同じ「心に掛けない。安心する」の意は余り使われず、「他の物事に心を奪われてぼんやりする。心が身に添わない」という和製語義が主と為る。⁴⁸⁾ 困碁の観戦記や棋士の自戦解説で敗着の説明として出る「放心の一手」は、物理的・生理的・心理的な散漫・虚脱・空白で瞬間に乱調の落とし穴に陥る結果である。勝利を目前に変な着手で栄冠に見放された坂田の蹉跌は邪念・放心に由り、「専心致志」は正に左様な「邪・魔」を退治する心構え・身構えの提唱である。第26期名人戦挑戦手合(2001.9.4～11.1)の間に、4-2で初防衛を果たした依田紀基名人(1966～, 93年九段)は「心」を揮毫し、相手の林海峰名誉天元は「無心」と書いた⁴⁹⁾が、専念の「心」と超脱の「無心」は表裏一体で大棋士の資質を物語る。報道人出身の作家三好徹(1931～)は実録文学『五人の棋士』(講談社, 75)の第4篇「勝負師の沈黙——林海峰」(初出=『小説サンデー毎日』73年6月号)で、65・68年に坂田から名人・本因坊位を挽ぎ取った林の強靱な精神力を活写している。23歳の林は名人位が手の届く処まで来ており逆転が有り得ない状況に於いても、禅語の「心ハ万界ヲ脱シテ不動」の様に表情にも動作にも踊った処は全く無かった。立会人に由る林の勝利が宣せられても本人の相好が崩れなかったのを見て、三好は其処まで見事に自己制御できる沈着・冷静を訝り、我々とは違った何かを生れながらにしてこの若い中国人の棋士は持っているのだろうか、と突き詰めたくなったが、林の一心不乱は「思無邪」の求道精神に由る究極の「専心致志」と

言える。

関西棋院の総帥に日本棋院の新鋭が挑む第6期本因坊戦七番勝負（1951.4.14 開始）は、「日関冷戦」（「東西冷戦」に因んだ碁界の評⁵⁰⁾）の鬪頭の熱闘として世紀の争碁に算え得る。真剣を翳して斬り結ぶ様な交戦は第5局（5.31～6.1, 山梨県甲府市昇仙峡「昇仙閣」）で白熱化し、双方が盤上に頭を乗り出したり相手を鋭く睨んだりして石音高く打つのを、福原義虎五段（1912～70, 58年六段, 追贈七段）は思わず身震いして、「坂田は青鬼で橋本は赤鬼だ。鬼と鬼の闘いだな」と呟いた。⁵¹⁾ 毎日新聞社の写真撮影担当者がこっそり撮った光景と共に語り継がれているが、勝者は『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 下』（本人解説, 志智嘉九郎執筆 [上巻同じ。猶, 1人2巻の場合は特に断りが無い限り同様], 1981）の「序」で、局面を凝視する両者の姿が暗黒の中に浮かんでいるその無気味で殺気立った写真は、誰がどう見ても淡々たる心境で盤に向っている様には見えないと書いた。曰く、碁は勝負である以上、必死に当らねばならず、鬼に為っても勝たねばならないが、碁は盤上で真理を追求する事でもあり、対局者が1つに為って、刻々に変化する複雑な局面に対処する最善を究めて行く事であろうから、冷静で平らかな心を保っていなければならない。「平常心という言葉がよく言われますが、平常心ではまだ俗事の入り込む余地があります。唐の王昌齡という詩人に“一片冰心在玉壺”という句があります。氷のように透き通った心、その氷も玉の壺に入っている清浄無垢の水、そういう氷のような心。（中略）こんな純粋な心境で盤に向かうことは人間業ではありません。お釈迦様ぐらいにならんとできないことかも知れません。しかし、むつかしいことであっても、それに近づく努力はしなければなりません。仏心にならんといかん、それでないとよい碁が出来ない。勝負だけを争う鬼ではいけない。」頭脳遊戯に始まり智力競技に発展した囲碁は特に強豪の角逐の中で真髓と極致を現すが、橋本が「勝負の仏」と名付けた鬪魂・雅致の結合は囲碁の最高の境地に為ろう。

井山裕太は江戸時代に日本の礎が築かれたとし、有名な「秀策のコスミ」の様に現代に伝わる好手も生れ、江戸時代の名人を尊敬している棋士は今でも少なくないと語った。⁵²⁾ 父親に無理矢理に碁を習わされたと言う藤井秀哉（1980～, 2011年関西棋院七段）⁵³⁾ の名前の様に、古の碁豪に肖り子供に夢を託す現代の愛棋家も居る。超一流棋士の中で最も江戸の名人に傾倒する小林光一は道策に私淑し、その棋譜を略暗譜しているだけでなく、息子が生れたら「道策」と名付けるかと真剣に考えたと言われ、⁵⁴⁾ 誕生日が同じ（9.10）で28歳差の東西両棋士の江戸碁界に絡む奇妙な接点は興味津々である。棋聖8連覇（1986.3.13～95.3.28）と名人7連覇・8期（85.11.21～86.10.9, 88.10.20～95.10.26）等選手権獲得数歴代3位（60）の小林は、本因坊位は挑戦4回（82・90～92）が全て趙治勲に阻まれ、岳父木谷實（1909～75, 56年九段）の挑戦3回（47年対薫和, 53・59年対秀格）全敗と重なる。禮子夫人（旧姓木谷）との間の娘泉美（1977～, 2006年六段）は女流本因坊3期（01.11.14～04.11.2）, 娘

婿の張栩は棋聖3期(10.2.26~13.3.14)・名人5期(04.11.4~06.11.3, 07.11.9~09.10.15, 18.11.2~)の他、本因坊も2期(03.7.24~05.6.28)経験し、「本因坊の伴侶」の美称は届かなかった2代の遺憾を埋めた様に思える。張夫妻は囲碁用語の「尖」(自分の石から1路斜めに連ねて打つ形)に因んで、後年に日本棋院院生(專業棋士候補生)に為った長女(2006~)を「心澄」と名付けた。泉美夫人が子供の頃に能く色紙に「澄心」と書いていた母親の薫陶も言われる⁵⁵⁾が、本因坊薫和揮毫の「澄心精慮」及び「一片冰心在玉壺」とも通じる妙味を持つ。

「国語辞典+百科辞典の最高峰」と銘打った「国民的な辞典」の『広辞苑』(新村出[1867~1976, 言語学者・辞書編纂家]編, 岩波書店)には、初版(1955)から最新の第7版(2018)に至るまで「澄心」は収録されていない。国内の最大規模を誇る『日本国語大辞典』の現行(第2)版(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞書編集部編, 全13巻+別巻, 小学館, 2000~02)に有る項目は、語釈の「『名』静かに心を澄ますこと。また、静かに澄みきった心」と、和文用例の「童子問(1707)中・七二“故専以黙坐澄心撰取精神為事, 要下超脱三界, 不生不滅上”」, 漢籍典拠の「文子-上義“老子曰, 凡学者能明於天人之分, 通於治乱之本, 澄心清意以存之, 見其終始, 反於虚無, 可謂達矣”」から為る。儒学者伊藤仁齋(名は維楨, 通称源佐, 1627~1705)の問答体の思想録『童子問』(3巻)は、江戸時代に於ける儒教の影響の強さと漢文表現の発達を感じさせるが、「専心」の2字と囲碁対局の有り形でもある「黙坐」を含む文が初出と為る「澄心」は、著者逝去の200年後に生れた実力制本因坊2代目の岩本薫和に愛用され、本書刊行の200年後に生れた同3代目の橋本昭宇が好む「一片冰心在玉壺」とも通底する。「精慮」の語釈は『広辞苑』と同じ「くわしく考えること」の次に「詳細に思慮すること」と有り、漢籍の「常袞-授孟暉京兆尹制“苦心精慮, 夙夜思職”」に由来したこの漢単語は、「彼日氏教授論(1876)〈ファン=カステール訳〉二・二“先づ之を沈思精慮せずんばある可からず”」が用例に挙げられる。西洋の教育専門書の訳語として現れたのは囲碁7大棋戦体制発足の100年前の事であるが、中国で死語化し薫和が自製成句にした「澄心・精慮」は張栩の造語「心澄」と共に、日本に根付いた漢字文化の豊饒さや一流棋士の教養と心・技の資質を表している。

第31期名人戦七番勝負(張栩名人対高尾紳路本因坊)第1局(2006.9.8~9, 新潟県長岡市[ホテルニューオータニ長岡])の2日目に、鈴木伊佐男(1968~, 99年七段)が主催紙『朝日新聞』の東京本社で、「専心致志」と書く自筆の色紙を手を持って広報用の写真撮影に応じた。

⁵⁶⁾江戸の高手に心酔し古譜の造詣が深い彼らしい由緒有る格言の発信であるが、「わき目もふらずひたすら」の意と説明されたこの成語は日本語に入っていない。中国語独特の「致志」は精神を集中し意志を貫く意で、力や意志のある方面に集中する意の「致」は「致力」(力を入れる)等の用法も有る。中国語と同じ意味の「放心」の類義語「放念」(和製漢語)・「放神」(=

安心、安堵)の字面が示す様に、ある物事に向ける意識や注意を持続させ得る集中力は、執念や精神力を継続する力と言い換えても差し支えない。和製漢語「集中力」に対応する中国語は「精神集中力」「專注力」と言い、「專注」(専心して注意する)を用いる熟語の「心神專注」は、他ならぬ心・精神の集中を指す。近義の「全神貫注」(全精神が高度に集中する)は全体・貫徹を強調し、全体の「体」の要素を含む和製熟語・成句「全身全霊を捧げる/傾ける」と通じて、中国語にも「全身心投入」(身心を全て投入する)が有るが、日本語にも入った「誠心誠意」を上回る「全心全意」は心神・意志の総動員を意味する。日本語の「致す」は「いた(至)る・いただき(頂)」と同源で、『日本国語大辞典』の「■『他サ五(四)』(動詞“いたる[至]”に対する他動詞形という)㊦㊧届くようにする。至らせる。㊨全力をあげて事を行なう。㊩(おもに“心”に関係のある語について)誠意を尽くす。できる限りの事をする。㊪(命、身などの語を伴って)命を差し出す。身を捧げて事を行なう。(下略)」の様に、誠意や全力を尽し乃至全存在等で目標に向って極限まで努力する意を持つ。㊩には出典の「論語・学而“事君能致其身-”」も付いているが、㊩に欠落した漢籍典拠として『孟子』「告子章句上」の中の「専心致志」の件が考えられ、この四字熟語の和訳は「全身心投入」とも通じる「致す」の多義に即して「専心尽力」が良からう。

「専心致志」は最古の棋士が碁を教える故事に託した儒教の至聖の説教に出ているが、「教育・教導・教授・教師・教学・教習・教戒・教示・教誨・教義・教訓・調教・宗教・教祖」等を構成する「教」は、中国では最古の部首別辞書『説文解字』(後漢[東漢, 25~220]の経学者・文字学者許慎[58頃~147頃]撰, 15巻, 121年成立)以来の正統な解釈として、上位の者が施し下位の者が習うもの、庶民が法(法、手本)に倣うもの⁵⁷⁾等とされる。異色の体系的な漢字研究に由って高名な中国文学者白川静(1910~2006)の説では、元と為る「教」の「爻」は屋根に干木(交叉する木)の有る建物の形で校舎を言い、「子」は其処で学ぶ子弟、2つの構成要素を組み合わせた「孝」は「学」(學・まなぶ)の元の字であり、「爻」に「支」(鞭)を加えて、学舎で学ぶ子弟たちを長老たちが鞭で打って励ます事、鞭撻する事を示し、「教」は「おしえる」の意味と為る。中学生を含む広い読者層に向けた晩年の『常用字解』(平凡社, 2003)の解説は更に、「干木のある建物の形式は、わが国の神社建築に残されているように、神聖な建築形式である。古代の中国では、その神聖な建物に一定年齢に達した貴族の子弟たちが集められ、長老たちから伝統や儀礼などを教えられたのである」と述べる。前の項の【強】と結び付ければ「教」と同音(jiao)の「叫ぶ」(言い付ける)の強引きや、「教える」と重なる教・学の「押し→得る」の授与・受領の関係に思い至る。

「論語に“芸に遊ぶ”という語があり、孔子はそれを人生の至境とした。この芸は六芸、中国の古代の学芸のことである。学芸の世界も、また遊びの場である。」白川静の『私の履歴書』(『日本経済新聞』1999.12.1~12.14~31, 『回思九十年』[平凡社, 2000]所収)第29節「遊び」

この1節は、日本の新聞の学芸部が囲碁の報道や棋戦の設営を担当する理由の説明に為る。六芸は古く中国で士以上の者の必修科目とされた礼・楽・射・御(騎馬)・書・数の6種の技芸で、日本語では転じて、ある特定の階層や社会等で習得しなければならない6種の技芸をも指す。『日本国語大辞典』の「りく-げい【六芸】」■②(和製転義)の用例は、江戸時代の盤上遊戯の流行を窺わせる「洒落本・禁現大福帳(1755)三“茶湯 誹諧 挟将碁 琴 三絃 押絵細工是を六芸(リクゲイ)と極まる事”」である。六芸は六経(五経+秦の焚書[民間に蔵する医学・農業・卜筮等の実用書以外の本を全て集めて焼却する学問・言論統制の暴挙]に滅び伝わらなかった『楽経])の別称でもあり、儒教の根幹との通底は「四芸」中の囲碁の学・芸・遊一体に符合し、**体育部門が囲碁事業を仕切る中国よりも濃厚な日本碁界の儒教文化と文化的な香り**を思わせる。白川は故郷の福井に居る時に夕涼みの床将棋で将棋を覚えた後、大阪に出て職探しの間に関西棋院の棋士に定石を習い実戦指導も受けた事が有り、呉清源時代の新聞の棋譜を切り取ったり橋本宇太郎の対局を観戦したりした。同じ立命館大学文学部教授の非專業強豪(6段)には2目を置いて打ち、容易に勝ち切れなかったと自称するから4段弱は有ったろう。千年紀の交に世界頂上級の発行部数を持つ大新聞を賑わしたこの逸話は、**囲碁の日本に於ける層の厚さ・水準の高さや漢字文化との親縁**を物語る点でも興味深いが、その囲碁開眼の地の高手にも「教」の厳酷を現す極端な体験が有る。

『現代囲碁大系』第16巻『鯛中新・鈴木越雄・窪内秀知・宮本直毅・本田邦久』(本人各自解説、近藤隆史執筆, 1982)の巻末論考「関西棋院の山系」に拠ると、個性派棋士鈴木越雄(本名憲章, 1915~85, 69年関西棋院八段, 追贈九段)は、囲碁歴1年・棋力3級の12歳時に久保松勝喜代六段(1894~1941, 40年七段, 42年追贈八段, 2004年追贈九段)の内弟子と為った後、兄弟子たちにこっ酷く負かされる事で嫌気が差して、更に師匠の言い付けを守らず夫人や母堂に度々借金をした故に3ヵ月で破門された。神戸市内の碁会所を転々と居候して回っている内に師匠も心配して復帰させたが、相変らず熱意が足りない為に再び破門された。3度目の入門後は1歳年少の兄弟子田中不二男(1916~40, 36年四段, 追贈五段)に、「君はいまは弱いがいつか花が咲く。君にしか打てない独得の手を伸ばしたらどうか」と励まされて勇気付いた。奮起の契機を為した異例の破門・再破門は長老が不意の鞭で少年を打つのに等しく、「教」の元とされた「教」の半分を持つ「殺」と大半重なる「殺」の猛威すら感じられる。

昭和後期~平成初期には木谷實一門が頂上陣の大半を占める時代が長く続いたが、俊英の輩出には木谷道場の師範を務めた梶原武雄(1923~2009, 65年九段)の貢献が大きい。棋聖・碁聖各1期(1995年獲得)の小林覚(1959~ , 87年九段)の回想に拠ると、木谷の弟子たちが週1回の研究会で1人ずつ梶原の前に自分の碁を並べ講評を受ける際、1手目を小目(隅の第4線と第3線の交点)に打つと「何故そう打つ」と訊かれる。何故と言われても……と口籠っていると「皆が打つからか」と問い質され、「そこで“はい”などと答えたら最後、30分

くらいひたすら怒られる。」「恐かった。門下生はみんな固まりました。“こんな手、昔ならキセルがとんだ”といわれ、“キセルってなんだ?”と思いながらすくんでいました。』⁵⁸⁾ 師匠が煙管で弟子の頭を敲く旧習は彼の入門(1966)～入段(74)の時代にはもう廃れたが、師が弟子を鞭で打って励ます意の「教」の性格は和製漢語「教鞭」に現れている。『日本国語大辞典』の「〔名〕教師が生徒を戒め教えるために使うむち。また、授業の時、教師が教授事項を指示するのに用いるむち」は、用例の初出と為る「銀の匙(1913-15)〈中勘助〉後・一“中沢先生は〈略〉どうかむかっすとすれば教鞭でもってぐらぐらするほどひとの頭をぶったりした”」の様に、文字通りの「鞭撻」が本来の使途である。

体罰が許されない時代には日本語でも中国語でも単なる教具の意味しか無いが、その小説の前編・後編の間に生れた呉清源が幼時から家で受けた過酷な英才教育の様に、20世紀前半に生きた両国の囲碁高手は重圧延いては苦痛を伴う厳格な訓練を強いられていた。初手から緊張感を求める梶原流は漠然・漫然たる姿勢を否定する集中力・精神力の塊^{かたまり}と言え、鈴木越雄少年に対する久保松勝喜代師の破門は不純・無気力を罰する処置であり、何れも奕秋の忠実な教え子に見る「専心致志」を貫く棋士の模範的な姿に値する。中国語でも達成・実現の意が有る「致」の「至+攴」の字形は、「教」の字の「校舎で学ぶ子弟を長老が鞭で打って励ます」^{イメージ}形象、「勉強を強制する」意味と重なり合う様に鞭撻→成就の寓意を含む。「勉強」の和製語義には学問や技術等を学ぶこと、社会生活や仕事等で修業や経験を積むことが有るが、中国語の「頑張ってる」「無理強いする」「嫌々ながら」等の多義は抑々強制的な感じが強い。中国語で「致」と同音(zhi)の「志」の「士+心」は文士・武士の心を思わせ、集中力・精神力の「専心・致志」は囲碁の知の創造・力の激突の複合性格と符合する。

一生懸命——途な求道と悲壮な殉道^{じゅん}

米国の情報・通信超大手企業マイクロソフトの創業(1975)者ビル・ゲーツ(1955～)は、世界の長者番付で18回(94～2006, 08, 14～17)首位を占めた超富豪である。2～3位に居る年が多く2007年に1位と為ったバフェット(1930～)は、世界最大の投資持株会社バークシャー・ハサウエー(1939年創立)の経営者で、その凄腕と実績は中国で「股神」(「股票」[株式]投資の神様)と崇められる程である。共に慈善活動家でもある2人は曾て面会取材で成功の秘訣を各自で紙に書くよう求められた時、示し合せたわけでもないのに同じ“focus”(注意・精神を集中させる)で表した。⁵⁹⁾ この英単語は原義の「炬」に転じた「焦点」の他に興味・活動等の中心・的の意も有る⁶⁰⁾が、「青鬼」と「赤鬼」が熾烈な戦いで盤上の1点を睨み付ける光景はその名詞・動詞の両義で表せる。三好徹は「勝負師の沈黙——林海峰」で主人公の碁界随一の検討熱心の例として、第9期(旧)名人戦で藤沢秀行に奪冠された日(1970.10.17)

の約1時間の局後検討の終了後、勝者と多くの関係者が去った対局室の深い沈黙の中で盤上の一点に眸を凝らした、と書いている。2000年代半ば～10年代半ばの世界最強の李世石(1983～, 2003年九段)も、敗局後の感想戦に満足せず敗因の徹底解明の為に1人で盤側に居続け不眠不休の探求も能くした。第2回 Mily 夢百合杯世界囲棋公開賽(公開競技, オープン戦)決勝五番碁の第2局(2015.12.31, 江蘇省南通市)で、新しい世界覇者の柯潔(1997～, 第2回百靈愛透杯世界囲棋公開賽優勝[15.1.14]に由り四段→九段に特進)に負けた後、今までの世界戦で経験した最も惨めな逆転負けと受け止め早く忘れてしまいたいと言ったが、第3局(16.1.2, 同省如皋市)の連敗で王手を掛けられた後は再び重い精神的な打撃を受け、独りで坐って沈痛な反芻・自省に没頭し翌日(次局の前日)の午前10時頃やっと寝台に就いた。⁶¹⁾ 米国の2人の著名な経営者・投資家の集中力は時間・精力を傾注する精神力に他ならないが、中国語で「聚焦(光を焦点に聚める。[視線・注意]が1カ所に集中する)」と言うfocusは、洋の東西や事業の分野を問わず成功に繋がる要素として普遍的な価値が有り、その原理は中国・東亜細亜や囲碁に深く根付いた儒教の「専心致志」に遡れる。

呉清源(1914～2014, 50年九段推挙)対木谷實の打込(数回の対局に所定の回数を相手に勝ち越すこと。実力差の確認に由って手合割を可変にする勝負。十番打込碁に多い四番手直り[手合割変更]では、勝敗の4局差を付けた時点で打ち込んだ事に為る)十番碁第1局(39.9.28～30)の3日目、持ち時間が残り少ない後者は黒157を打ち下した後に鼻血を出し、神奈川県鎌倉市の建長寺の禅房の廊下に出て悶々と転がっていた。彼は頭を手拭で冷やしつつ「向うが考えている間に、私も見てみたいのだ」と叫び、一時は無理に盤の前に坐ったが、「駄目だ」と躊躇きつつ再び廊下に転がった。三堀将(本名将, 1901～96, 新聞人・囲碁著述家)は名観戦記として知られる文章で、必死な打ち手が「最後の夜深く、鬼気人に迫り凄気地にみつるの一場面を展開した」と経緯を綴った。「室の中央、煌々たる電灯の真下には、険しい顔をして呉七段が長考してゐる。騒ぎをよそに、否騒ぎも耳に入らぬのであらう。三十分もその姿勢のままなのである。フト天上を仰いだ。眼は上へ、心魂は盤上へ注ぎ込まれてゐるのである。先程から呉氏は一言も発しないのだ。百五七が打たれて以来、水よ葉よとうろたへる人々の騒音もよそに、呉氏は三十余分といふものを黙々たる思考の中に過したのであつた。正に一心不乱である。」残り9分しか無い木谷の苦境を配慮して棋院の幹事が休憩を申し入れ、呉は相手に有利な提案を即座に承知し、「廊下に向つて“木谷さん、どうします、休みますか。私はもう打ちますよ”と言ふ。水を打つたやうな沈黙が数分。すぐれぬ顔色の木谷七段が濡れ手拭で鉢巻きをしたまゝ廊下からよろゝと出て来ると、呉七段が百五八に打下して此の大劫を片づけてしまふのと同時であつた。」呉の着手宣言を不人情として非難する投書が多かったが、局面に没入する余り木谷が鼻血を出した事を知らず、着点が決つて漸く我に帰り木谷が居ない事に気が付いた、と言うのが真相である。⁶²⁾ 呉は親友・戦友(新布石革命[1933.10 勃発])の

共同発起人) 同士でも大勝負と為れば、この常人に想像・理解し難い姿勢・挙動の様に真剣・忘我の常態を極端にまで呈すのである。

昭和前期の碁界の旗手・巨匠である呉清源と木谷實は其々、困碁の発祥国の「専心致志」の理念と当時唯一の先進国の「一所懸命」の氣風を模範的に体现した。鎌倉時代前期に生れた和製熟語「一所懸命」は、賜った1ヵ所の領地に懸けて生活の頼みとする事、又その領地が原義で、転じて物事を命懸けですることに言い、「一生懸命」の表記と混用する。死活・勝敗に関する困碁の地の争奪を生業とする專業棋士は、正しく碁盤の一所に一生を懸ける人種である。鈴木為次郎(1883~1960, 42年八段推挙, 57年名誉九段)は絶えず碁の事を考え、散策中の思索に耽って馬の尻にぶつけた時に状況が分らない儘「失礼」と謝った。⁶³⁾唐の詩人賈島(779~843)は乗っている驢馬の上で佳句を練る時、「僧推月下門」(僧は推す月下の門)の「推」を「敲」に改めようかと迷い、手綱を執るのも忘れて手で門を推す・敲く真似を交互にし続けたが、余りに夢中になって故に向うから役人の行列が目の前に来た事にも気付かず、知京兆府事(長安の都知事)韓愈(768~824)の一行に突っ込んでしまった。捕まえられた彼は唐宋八大家の筆頭である文学者・哲学者の韓に経緯を説明し、韓は月下に音を響かせる風情の有る「敲」の方が好かろうと助言し、初対面の才子への敬意を込めて馬を並べて行きながら詩を論じ合った。この故事に由来した「推敲」は詩文を作るのに字句を様々に考え練る事の比喻と為り、「三思而後行」の吟味・再考とも通じる最善への追求である。中国の棋士にも碁に思いを巡らしている内に電柱にぶつかる様な事が珍しくないが、藤沢秀行は若い時に歩きながらの熟考が過ぎて横浜駅で歩廊から落ちた事が有り、赤信号に気が付かず道路を横断しようとして死に懸けた事も有る⁶⁴⁾から、棋士の専心度と困碁の先進度の正比例は呉・藤沢の最盛期と昭和の黄金期に見られた。

「脂汗を流し、血反吐を吐くような、人の何倍もの修行を積みながら、自分らしい碁を打たとき、立派なものが出来上がるに違いない」という藤沢秀行の論断⁶⁵⁾は血や反吐を吐く先人や同輩の実践を踏まえている。「血を吐く思い」(極めて辛くて苦しい思い)を超えた「血を吐く戦い」として、赤星因徹(幼名千十郎、後に因誠・因徹, 1810~35, 34年七段上手)の絶局(国語辞書に無い和製棋界用語、=人生最後の1局)が史上第一と為る。彼は師匠の井上玄庵因碩の命を携えて、丈和を名人碁所の座から引き摺り下ろす作戦として格上の相手との決闘を敢行した。3回の打ち継ぎを挟んで4日掛り行ったこの対戦(7.19~27 [西暦8.13~21], 石見浜田 [今の島根県浜田市] 藩主松平康任 [1779~1841] 邸)は、序盤は井上門の秘手(大斜定石 [目外し [盤端第5線と第3線の交点] から相手の小目の石に掛ける [隅を先占している相手の石に制限・攻撃・包囲の手掛りを求める手段] 定石 [序盤に隅で出来る、双方が最善を尽し通常五分の分れに為る定型] の新手)を放って優勢に進めたが、中盤から丈和は白68・70・80の妙手で挽回し246手完・中押勝ちで制し、重度の肺結核を患った因徹は投

了後に吐血し2ヵ月（閏7月を挟む）後の8月28日（10.19）に早逝した。初代実力制本因坊の関山利仙も第2期本因坊戦五番勝負第2局（1943.7.7～9）の最終日に、黒89の1手だけを打った処で脊髄疾患から来る神経性胃炎の悪化で盤側に倒れ、持病の治る見込みが無い故に棄権負けと為り盤上に散る現代名家の第1号に為った。対局で盤に向うと胃痛が起り吐き気が生じるといふ神経的な病気であり、対局日が近付いて数日間物を食べないのでは衰弱死してしまふので、夫人と医師に付き添われ間断無く起きる発作の度に栄養注射をしては臨んだのだが、前日からの嘔吐と下痢で一物も口にせぬ病身は畢竟無理の限界を乗り越えられず、最後の徹夜打ち切りまで粘り通す事も無く精根を使い果した。⁶⁶⁾

『現代囲碁大系』第5巻『橋本宇太郎上』の「最初の本因坊戦優勝者」と題した本局の内、第8・9譜（132～153、154～183）の解説「一石三鳥の急所」「新本因坊誕生」に、囲碁評論家・囲碁著述家安永一（1901～94）の観戦記が引用されている。「この一局だけは完成したかったのだが、実は万策尽きたのである。完成したい熱望は対局の棋士、殊に本因坊が三日目の朝、ただ葡萄糖五十グラムを注射しただけで夫人に助けられながら重い足取りを対局場に運んだことによつて知られるだろう」/「私はこの原稿を急ぐため対局場の別室でペンを執っている。彼方の室では仰臥したまま本因坊が血漿を絞る悲痛なウメキ声を発している。吐気を催すたびに発する血を吐くような叫び声に皆暗然として隻語を発するものはない」。元專業棋士（秀哉門下で四段、昇進年未詳）の筆者は1932年に日本棋院機関誌『棋道』月刊の編集長に就任し、34年に木谷實・呉清源と共著の『囲碁革命 布石新法 星・三々・天元の運用』（平凡社）を執筆・刊行し、**棋書史上の記録的な一大旋風**を巻き起した文筆家である。橋本挑戦者はその講釈師の口調に近い叙述を「大袈裟」と評し、関山は1日目夕方の打ち掛け後に一緒に帰途に就いた時、昼食に食べた天麩羅の所為か腹の具合が悪いと零したが、盤に向つていても呻き声を出して苦しむ様な状態も無く、七転八倒する程に酷い苦しみ方でもなかったと言う。但し煽情的な誇張が混じるとして棄権の結末が示した戦場の危険は痛感でき、決勝の激闘で血漿を絞る件は中国語の「絞尽腦汁」（脳漿を絞り切る）と通じる。木谷・呉打込十番碁第1局の悲壮な場面と二重写しに為る初代実力制本因坊の痛恨事は、究極の頭脳競技の言わば「初めに受難・犠牲有りき」の宿命を体現した。現役時代の実質的な「最晩年」⁶⁷⁾と為った33歳時の強制終了は事実上の退役を意味し、長い休場を経て9年後の全日本本因坊八段戦で岩本薫和对したのが最後の公式戦出場と為り、不完全燃焼を通り越す完全不燃焼の儘で還暦を迎えた直後に悲運の生涯を閉じた。思考に没頭した藤沢秀行の鉄道線路への転落や信号無視の横断は文字通り命懸けであるが、肉体生命や棋士生命の終焉を恐れず病体を鞭打って戦った因徹・利仙は正に必死であった。

木谷實は五段時代の1932年秋の日本棋院大手合（棋士の昇段を決める定式対局）で橋本宇太郎四段と対局した時、2日目（最終日）の熱戦が翌朝まで掛った処で脳貧血を起して人事不

省に陥った。医者^のの診断で精神過労の所為だと判明すると1時間ばかり横になって休養し、後に打ち継いで5時過ぎに終局し持碁と為った。昏倒^{こんたう}前の終局^{まきわ}間際の形勢は僅かながら橋本に残ると見られたので、休養中に持碁にする手段を考え出した精神力は誠に畏れる可きだと橋本は言う。彼は時間を稼^{かせ}ぐ為に自ら倒れたのだらうという臆測^{おくそく}を否定し、1分碁を最も得意とした木谷も秒読みの中で精神の極度の集中を強^しいられた結果だと断じる。⁶⁸⁾ 木谷は八段時代の第4期本因坊戦五番勝負第3局(1947.11.25~27, 東京「鉄道工業会館」)の最終日の夜戦でも、秒読みと為っていた170手台^{あた}辺り突然貧血を起して倒れた。立会人は規約通りで時間切れ負けにせず休憩する事を提案し、相手の薫和七段は「人間生身、不測の事故はやむを得ない」と考えて快諾し、当人は別室で休み葡萄酒を飲んで暫くする内に快復した⁶⁹⁾が、身心の酷使の結果1954年2月24日に自宅庭で弟子等と卓球の最中に脳溢血^{おうえつ}で倒れた⁷⁰⁾。彼は2年の静養を経て1956年12月13日に九段昇進を果し、57年2月の第1期高松宮賞・東京新聞社杯争奪囲碁選手権優勝、3月2日の第2期最高位戦優勝(坂田栄男を3-1で撃退)と翌年の同棋戦連覇・第5期日本棋院選手権挑戦(坂田栄男に0-2で敗退)、59年の第14期本因坊位挑戦(高川秀格に2-4で敗退)、60年3月20日の第7期NHK杯優勝等、生涯の全4回の選手権獲得を含む良績を上げた。その後2度目に見舞われた脳溢血は、第19期本因坊挑戦者決定総当り戦での対高川局(1963.12.26~27 [双方が所属する棋院での対局は特に場所を記入しない])の2日目の夜の事で、盤だけがぼっかりと見え後は真^ま暗^{くら}という状態で打ち続け終局後に昏倒した。3日後に意識を回復し彼は義務対局だけは打つという固い意志で2ヵ月半後に復帰し、第3期名人挑戦者決定総当り戦で呉清源・藤沢秀行等を破って6勝1敗の優位に立ったが、挑戦権獲得の可能性さえ生じて来た中の対藤沢朋斎戦(1964.7.1~2)の2日目の夜に、中盤の難所で攻防に鎬^{しのぎ}を削っている内に積年の疲労がどっと出て、黒169と切って凌ぎ優勢が固まった直後、傍^{はた}から顕著に見えた異状に医師が呼ばれ、血圧が200超で続行不可と判定され棄権負けを喫した。本局は『現代囲碁大系』第9巻『木谷實下』(小林光一解説、相場一宏執筆、1982)の最終(第25局)を飾り、「最終の傑作譜」と題した解説は「これが、木谷の実質的に最後の一局となった」とする。翌年3月21日に入門した小林光一は師匠の病み上がりの姿を「80歳くらい」と感じた⁷¹⁾が、56歳だった第6期朝日プロ十傑戦本戦1回戦の对本田邦久七段(1945~ , 73年関西棋院九段)局(68.12.24, 東京・四谷「富田」)は、4年来減り続けて来た公式戦出場に終止符を付けた。肉体生命も実質的な最終局^{ちゆうとう}の恰度9年後(1973.7.2)の3度目の脳溢血で到頭終点へと向い、翌年3月の「四谷木谷道場」閉鎖を経て翌々年の12月19日に心不全で逝^いった。幾多^{いくた}の苦境を乗り越えた彼は和製熟語「絶体絶命」の字面通り体力を失い命も落したが、病魔^{びょうま}につき纏われた果ての言わば過労死は殺人的な競技への壮絶な執念の代償^{しやう}と思える。

木谷實が1964年の復帰第1戦(63年度プロ十傑戦3回戦, 2.6)で闘った島村俊宏は、利博24(434)

八段時代の58年の最高位挑戦で木谷に2-3で敗れ、直後に十二指腸潰瘍の手術を2度受け、戦列に復帰した後11月の第4期最高位戦の細川千仞八段(1899~1974, 71年退役九段)との対局で、2日目の夜に勝ちが不動の大詰めで心筋梗塞の発作に襲われ、昇段が懸り挑戦権獲得に繋がる碁は棄権負けと為った。病院に担ぎ込まれる大騒ぎの中で意識不明の儘に讒言で碁の事ばかり言っていた姿は、「吐き気を催すほど考える事が出来なければ専門棋士の資格が無い」と唱えた彼⁷¹⁾らしい。「忍の棋道」の提唱者は渋い棋風と同じ辛抱強さを發揮し、第4・8期囲碁選手権戦優勝(1960・64)と第9期準優勝の後の低迷を乗り越えて、第3期天元戦決勝でそのだゆういち苑田勇一八段(1952~ , 78年関西棋院九段)を3-1で下し、65歳時の優勝(77.12.22)は選手権獲得の最高年齢記録(当時)を作ったが、82年3月11日の名人戦総当りで坂田栄男との対局中に脳出血で倒れ、翌年の引退後に意識が戻らない儘91年6月21日に他界した。大一番で彼を追い詰めた「乱戦の雄」「劫の細川」も同年に還暦間近の「夢の昇段」を遂げ、東京新聞社杯争奪戦で敢闘に由り高松宮賞に輝いた(準決勝で曲励起八段[1924~ , 74年九段]に敗れたものの、大敵坂田の大石(石数が多く長く連なっている一群の石。未だ生死が不明の儘の場合を指す事が多い)をきりきり舞いさせ3度の劫争いを全て勝ち最後に制した1局が評価された⁷³⁾が、68年に帰省先で倒れ74年11月29日に脳出血に心不全を併発して没した。同年代の向井一男(1900~69, 59年七段, 追贈八段)は、四段時代の35年の第1回日本囲碁選手権大会決勝で呉清源六段を破り、68年に雪崩型(小目に対する一間[盤の目1つ]又は二間(同2つ)高掛り[隅を先占している相手の石に高い位置から掛る手段, 4線の場合が多い]から生じた定石, 大雪崩・小雪崩に大別される。大正に現れ昭和に研究・運用が盛ん)の新手に由って、関西棋院機関誌『囲碁新潮』月刊の第1回新手賞を受賞したが、盤に向うと世事一切を忘れる律儀な彼の死因も脳溢血である。⁷⁴⁾

『現代囲碁大系』別巻『現代囲碁史概説・現代囲碁史年表』(林裕執筆, 1984)の「現代囲碁史年表」の冒頭の「一九二四年(大正一三)」は、「一月 一月六日, 小岸壮二, 腸チフスのため重態, 本因坊秀哉は小岸の再起不能を知り, 六段に昇進させる。翌七日, 小岸没。享年二十七歳。東京巢鴨・本妙寺の本因坊歴代墓地に葬られる」で始まる。日本棋院設立の年の真っ先に出た強豪病没は65年後の昭和終焉と同じ日付であるが、昭和碁界の「初めに苦難有りき」の運命と棋士の脳力消耗・心労蓄積の宿命を物語る様に、大正末年(1926)の「七月 七月十一日, 故小岸壮二六段の追善碁会, 棋士一同の発起により日本棋院で開催。二百余名が参会」の前に、「六月 六月二十九日, 斎藤賢徳四段, 脳溢血のため盛岡で死去, 享年六十五歳」と有る。1924年1月の次の「一月一三日, 方円社新年会。広瀬平治郎, 前年末より脳病を患い, 社長を引退。六代目社長に岩佐銈, 副社長に加藤信が就任」は、村瀬秀甫の主導で1879年4月20日に発会した組織の責任者の交代であるが、1920年に就任した広瀬(1865~1940, 12年六段, 21年七段, 追贈八段)は、「脳苦」(「苦悩」を撰った造語, =脳の病苦)に由って退任

を余儀無くされたのである。

45年間に亘って当時の世界史上の最も繁盛した囲碁組織を為した方円社は、日本棋院創立に参加の為同年6月21日に発展解消した。結成の前年に生れた最後の社長（1913年六段、26年七段推挙、追贈八段）の最期は、1938年11月1日の事項として「脳溢血で療養中の岩佐銈七段が死去。享年六十一歳」と記してある。1940年5月16日の「日本棋院名誉棋士・広瀬平治郎七段、脳溢血のため名古屋で死去。享年七十六歳」は、同年1月18日日の「本因坊秀哉名人、心臓発作のため、熱海温泉“うろこや”で死去、享年六十七歳」に誘因が有る。社長辞任後に碁界から離れて名古屋に隠棲した彼は秀哉没後に上京して棋院運営に協力し、**心身の限界を超える無理が祟って後任と同じ病魔に命を奪われた**。本因坊名跡を巡る争いから秀哉の宿敵と為っていた雁金準一も、方円社発足の年に生れた元老（1907年六段、25年棋正社七段、33年同八段）であるが、59年元日に自ら率いる瓊韻社（41.6.1結成）で九段に推挙された後、2月21日に心臓麻痺で逝去した（日本棋院より名誉九段追贈）。同年1月23日の「日本棋院棋士・加藤昭博四段、心臓麻痺のため死去、享年二十二歳。五段を追贈」や、1941年12月15日の「久保松勝喜代七段、心臓性喘息病のため神戸の自宅で死去、享年四十八歳」等と共に、**脳と共に激戦に耐える生命線に当る心臓の重荷の大きさを物語る**。

雁金準一と共に裨聖会・棋正社（1922.11.3, 24.11.16発会）を立ち上げた鈴木為次郎は、紫綬勲章受章の17日後（60.11.20）に脳溢血で雁金と同じ東京都板橋区の自宅で逝った。1946年4月18日の「三宅一夫七段、脳軟化症のため、名古屋で死去、享年六十一歳」は、17年四段、27年棋正社五段贈与を経て29年に名古屋に東海棋院を立ち上げて六段と成り、32年に同棋院七段、67年に日本棋院が七段を追贈した中部の大物の物故である。専門棋士が相対的に少ない中部の重鎮島村俊廣の脳出血→他界と合せて、**内外の碁界の総本山を為した日本棋院東京本院に負けない緊張感が伝わって来る**。名古屋の広瀬平治郎と神戸の久保松勝喜代の両大御所の訃報の間に、1941年2月11日の「井上孝平六段、脳溢血のため豊島区池袋で死去、享年六十六歳」と有る。方円社設立の2年前に生れた彼は19年に五段を受けた後、22年に秀哉師に無断で『山陽新聞』の棋戦に参加した事で破門され、日本棋院の設立にも関わらず晩年は盛んに地方漫遊をした。首都から遠く離れた中部・関西とは別の次元の在野・圏外が存在でも、**第一線から退いて十数年経っても「常在戦場」歴の長い棋士と変らぬ運命を辿った**。時間的な連環の上で岩佐銈没（4年後に八段追贈）2周年の1940年11月1日に現れた関連事項は、「囲碁ライター・宏月凌（絶軒）、脳出血のため死去、享年七十三歳」である。1974年6月3日の「元NHK囲碁担当プロデューサー海野謙二（ペンネーム六文銭謙）、脳内出血のため死去、享年六十二歳。日本棋院は七段を追贈」、10月14日の「コンピュータ碁盤の創始者・池田敏雄博士、脳出血のため死去、享年五十一歳。日本棋院は七段を追贈」は、**関係者にまで移る頭脳競技の専門業者の一種の職業病の恐ろしさを思い知らせる**。

儒・道共生——「懸命流→賢明流」の進化

中国の囲碁^{プロ}専門棋士段位制度は1964年初頭に試行的に発足した後、等級差別を嫌う「建国の父」毛沢東(1893～1976)の意思で軍の階級制度が廃止され(同年11月に準備開始、翌年6月1日より実施)、独善的・偽善的な絶対平等主義の影響で段位制度も他の多くの等級制度と共に発展無き解消(「発展解消」を振った造語)と為り、18年経って改革・開放時代の4年目に到頭復活した。日本より370年も遅い上に延べ人数も遙かに少ないので単純に比較し難いが、盤上に散る事は皆無で脳・心臓の病で棋士生命が縮まる例も殆ど聞かない。初代五段(最高)4人中筆頭の劉棣懷(1897～1979)は、42年10月に瀬越憲作・呉清源・橋本宇太郎が日本棋院上海支部発会に参加する等の為の訪中の際、他の5強豪と共に四段(当時最高)を贈られた名手である。彼は第1～4回全国囲碁個人戦(1957～60)で3位・連続優勝・5位を取り、第1回日中囲碁交流戦の中国の2勝32敗1持碁中の1勝を上げた(対瀨川良雄七段[1913～2002, 71年八段, 81年退役九段])が、第5回全国個人戦(62)で上位6強入り出来なかったのが契機で公式戦から遠ざかった。「文化大革命」(1966～76)中の政治的な迫害も一因で脳卒中に倒れ、素人愛好者に4子置いて貰う(逆の4級差)まで棋力が急激に落ちた儘に、瀨川が心筋梗塞で倒れた年に生涯を終えた。⁷⁵⁾開闢^{びやく}以来の中国最強の呉清源は坂田栄男と同じく青年期に蒲柳^{はりよう}の質で胸を患ったが、彼の早打ちは一種の健康防衛だったかも知れないという岩本薫が紹介した説⁷⁶⁾は、真実に近いと思われ「三思而行」に勝る「再、斯可矣」の合理性を思わせる。中国の国民性には現世至上主義に由る生への執着が有り、100歳5ヵ月まで存命した呉の大往生は長寿願望に基づく健康管理の結果と言える。呉が信奉した儒家の中庸思想は不偏不倚^{ひんい}で過不足の無い中正の道を良しとするが、彼の無理せぬ行雲流水の棋風・生活態度は高川格の「流水不争先」と通じ合う。

高川格は『秀格烏鷲うろばなし』(日本棋院, 1982年)第5章「苦闘」の第11節「朋斎さん」で、藤沢朋斎(旧名庫之助^{くら の すけ}, 1919～92, 49年九段)を大写しし彼我の違いを分析している。朋斎は秀策張りの本格派の手堅さで快速昇段(入段後16年で最高段到達)を果たしたが、師事していた秀哉の「碁は最強の手を選べ^べ可し」の考えに影響を受けた所為か、戦後は呉清源と(決戦)四番碁(1951.10.1～52.2.22)・(打込)十番碁(51.10.20～52.7.4, 52.10.9～53.3.13)を打つ頃から様変りした、と言う。大体次の着手を考える場合2つの行き方が有り、1つは最も強い手から考え、出来ればその場その場の最強手を打ちたい類型^{パターン}、もう1つは常識的な穏やかな手から入り、最強手を至上命令としない類型であるとした上、高川は朋斎と木谷實・梶原武雄・加藤正夫等が前者に属し、林海峰・石田芳夫と自分等が後者に属する。「前者の弱点は最強手を求めるあまり、しばしば限界をオーバーすること。最強手最善手はかならずしも一致しない。

後者の弱点は相場を重んずるあまり微温的になること。そのへんの兼ね合いはむずかしい。」第12期本因坊位防衛戦(1957.6.28~8.27)で朋斎を4-2で撃退したのも、第12節「秒ヨミに助けられて」の記述の通り相手の強情な故の自滅に負う処が多い。第13節「一人徹夜で検討」では同じ経過を辿った最終局の後日談として、夜遅く終局し検討も終わった後ぐっすり眠り、翌朝8~9時に目が醒めて部屋を出ると、何処からともなくパチリパチリ石音が聞えて来、女中に訊くと朋斎が昨日の碁を並べているのだった、と有る。疲労困憊に関らず自室の蚊帳の中に盤を持ち込み徹夜で並べ返している事に就いて、「これには恐れ入った。/とにかくとことん追究する一徹の人。木谷さんと一脈通ずる面がある。こういうタイプの棋士は昭和世代にはお目にかかれない。今様のスマートさと正反對の所に立っているのが朋斎さんである」と感慨深げに綴った。

日本棋院の内規では棋士署名の扇子の作成は棋聖・名人・本因坊経験者に限られるが、例外的に良績の無い中山典之(1932~2010, 92年六段, 追贈七段)が認められている。公式販売品と為る「囲碁いろは歌」(碁を主題にした手習い歌)と、珍瓏(所定の局面から征の手筋[特定の局面での殊に有効な手段, 急所に打ち意表を衝く好手を指すことが多い]を用いて所定の石を取る詰碁[一部分の死活を考えさせる研究課題]の一種。盤面に渡る大型の作り物が多く、名称通り珍奇・玲瓏な観の有る痛快で洒落た芸術的な意匠が特色と為る)「ハート」が示す様に、アマチュア出身で29歳時に入段した彼は異色の異才・異彩と晩成に相応しい大器の持主である。名記録係と専門著書・実録文学・珍瓏作品が多数有る作家としての才覚・名声は、世界の盤上遊戯の史上最高の域に達し、日本碁界の誇るべき至宝と言っても過言ではなからう。公式戦と記録係の経験局数が4桁に上り、碁書を100冊余り編著した脳力の酷使の所為か、彼は特に尊敬していた加藤正夫の後を追う様に同じ現役中に脳梗塞で世を去った。命日(2.16)が井上孝平の5日後と雁金準一の5日前に巡り合せた碁史の語り部は、現代の最盛期の生き証人の「遺書」として『昭和囲碁風雲録』(2巻, 岩波書店, 2003)を出した。第19章「呉清源, 天下無敵」第2節「高川, 本因坊九連覇」では表題の偉業に就いて、相手を角番に追い詰めると必ず次の局で止めを刺している事と、細かい碁に持ち込めば大抵物にしている事を指摘する。結語に「正確無比な形勢判断にモノを言わせ、得意のヨセで逆転するのは高川秀格のお家芸である。奇手妙手が少ないために、プロにはその実績の割には評価されなかったが、高川秀格は昭和を代表する棋士の一人であることは申すまでもない。一言で言えば現代碁の草分けとも言うべき、スマートな碁だった」と有るが、大正生れの当人の碁の伶俐さは彼が貶めた昭和世代の今様のスマート洗練さと異なる。

中山典之は高川本因坊9連覇の合計51局を並べて、能くも能力を全開して強敵を薙ぎ倒したものだ、楽勝と思われる年は1度も無く力を出し切ったの9連覇だと感じた。村島誼紀(1905~83, 本名義勝, 54年七段, 66年退役八段, 追贈九段)は50年代半ばに一流棋士の番付を作

り、心境面の第1位に高川秀格を置いたが、中山は「流石に智将村島。見るべきものは見ているものだ」と同感した。大棋士の心の強さと精神の境地の高さは「一片氷心在玉壺」の「思無邪」等と言うよりも、闘争心と平常心を持ち合わせる資質の高さや集中力と瞬発力を発揮する精神力の強さであろうが、高川は防衛戦の2番目の最大級の危機と為る第13期(1958.7.9～9.2)の瀬戸際で真価を見せた。6年前に4-2で撃退した杉内雅男の再挑戦はその後の対高川戦績が3勝1敗なので、高川は相手を角番に立たせながらも必殺の気合で第6局(9.1～2, 神奈川県箱根町強羅「石葉亭」)に臨んだ。本因坊戦に於ける高川の対局を6回観て来た心境小説の名家尾崎一雄(1899～1983)は、今回の観戦記で高川の曾て無かった異様な表情・挙動を描いている。「共に一分碁。秒読みの声に追立てられながらも、杉内さんは端然としていた。高川さんの方にはいつもの冷静さがまるで見られず、“弱ったな!”とか“負けた!”とか、それこそ絞り出すようなうめき声を挙げていた。」⁷⁷⁾ 中山は「紳士の体面を忘れ、能面をかなぐり捨て、半狂乱状態で逆転の半目勝をもぎ取った」高川を称え、「天はこの正体をさらけ出した高川に同情したのだろうか」と述べる。当人は『秀格烏驚うろばなし』第6章「不滅の九連覇」の第1節「七連覇達成」で、気力の限り克明に読みぎりぎりの追い込みに成功した本局は生涯忘れられないとした。又、有望な若手も一生懸命己の碁を打ち、命懸けで打つ重要な対局を早く体験してみるのが良いと勧め、数多くは転がっていない大勝負でカラカラに為るまで自分を絞り上げ、そして襤褸雑巾みたいに為れば必ず大きな飛躍が来るだろうと諭す。

『現代囲碁大系』第18巻『高川格上』(本人解説、村上明執筆、1981)の巻末論考「高川格 人と碁」には、その勝負師としての秀れた面は何を置いても集中力の素晴らしさだという断言が有る。第4節「集中力」で引いた本人談は「過去に於て、この一番で昇段という碁は全部勝っている」、「僕が一所懸命打った碁かどうかは、時間付けを見てくれればわかる」と教える。元『棋道』編集長で囲碁著述家の筆者(1934～97)は彼の対局姿を取り上げて、此処一番という時の気合の入り方は凄く、その細い身体から精気のような物が陽炎の如くゆらゆら立ち上り、曇った眼鏡の奥で鋭い目がギョロリ、ギョロリと光るのである、と記す。碁に由って気合の入れ方が違いその意識の差が消費時間に現れるという点に関連して、第3節「盤外の武器」の論説は時間の使い方**に**強味の一端を求める。曰く、中盤まで殆どの時間を使ってしつ終盤から秒読みになるのは愚かな事で、長考して仮令妙手を放つても秒読みに追われ寄せで損をして負けたのでは何も為らない。「そんなことは誰にでもわかっていることなのだが、いざ盤に向うと自分の気持ちが制御できなくなってしまい、気のすむまで考えてしまうものである。しかし高川は時間を残すことを絶対条件とする。そしてそれを実践できるというのが、常識人として聡明なところなのである。」勝負師たる個性を持つ事は一流棋士の条件の1つと言って可く、個性が薄く常識人たる要素が強ければ碁は弱いと評価されるが、高川に限っては両方を立派に兼ね備えており、常識人たる要素は大きな戦力にも為っている、とも綴る。盤上に道を求める

「芸至上主義」が従来一流棋士像だった1950年代に、高川は持ち時間等を武器に用い新型の強豪として「現代の勝負師」と呼ばれた⁷⁸⁾が、その今風の「賢明流」(造語)は古風の「懸命流」(同)の進化であり、所謂昭和世代の今様のスマートさと一線を劃す彼の賢明さが有るとすれば、同じ大正生れの藤沢朋斎・坂田栄男・藤沢秀行・梶原武雄等と共通の懸命さを内包する処であろう。

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第17章「高川秀格の時代」第3節(同題)の最後に、前出の『秀格烏鶯うろばなし』の回想を引用して「さむらい朋斎」を悼み、「私は記録係として一千局、観戦記者として五年、棋士として一千局の対局をしたが、無念の敗局を徹夜で並べ直していた例は三つしか知らない。藤沢朋斎、橋本昌二、梶原武雄。何れも不器用な、頭の悪い時間の費い方をし、タイトルを取ることが大嫌いな(?)面々だが、私個人としては、高川秀格先生と同様、大好きな先生方である」と記す。効率重視の合理主義から勝負所を想定し時間を残して置く高川⁷⁹⁾・呉清源とは対極的に、3人とも納得の行く手を見付けるまで勝負を度外視して思索に耽る求道派である。長考派の両巨頭を為した橋本昌二(1935~2009, 58年関西棋院九段)と梶原武雄は、第8期王座戦本戦1回戦(59.4.6~7, 東京中央区呉服橋「千代田館」)の1日目に9手しか打たず、布石を練り羊羹みたいに練った為、中盤戦が始まる前に秒読み合戦に突入し3日目の午前2時に勝負が付いた。初日の封じ手の際に上の空の梶原が呟いた「今日の蛤は重い」は、持ち時間10時間の約1割も1手目に投入した橋本の「怪拳」(造語)と共に碁史に残った。『現代囲碁大系』第30巻『橋本昌二』(本人解説、谷本弘執筆, 1981)の巻末論考「親子鷹 評伝 橋本昌二」の「一」に拠ると、彼は座右の銘の「一生懸命」の通り余興の遊戯でも全身全霊を打ち込み、気分転換の為に行る麻雀で1手に40分も考えた事が有る。小学生の子供と遊戯をする時も1手1手を疎かにせぬ慎重ぶりは、幼い頃の彼を相手に指導碁を打った木谷實の「超」の字が付く生真面目さと重なる。その3子局は夜の1時頃になって、白が危機に陥り起死回生の道はなかなか見付からない。「そこで木谷がこんこんと考えだした。そして考えも考えたり、なんと三時間半も考えたのである。木谷はその時三十八歳、疲れを知らぬ男盛りである。一方の橋本はなんとといっても十一歳の子供である、とうとう盤前で居眠りをはじめてしまった。そして大長考ののち白の打った手に応じた黒の手が失着となり、死んでいた石が活きかえって、橋本が負けてしまったのである。」

橋本昌二が生れた時に日本棋院台北支部長を務めた父親国三郎(非專業4段)は、台湾から引き揚げた年のこの1局で木谷實の芸熱心に今更の様に驚くと共に、こんな小さな子供がこれからこういう修行を積んで行かねばならんのかと、2~3日の間に暗い気持ちを拭い去れなかった。70年後の2016年10月1日に專業入りした将棋棋士藤井聡太(2002~)は、驚異的な良績で数々の大記録を更新する等と超新星の出現で列島を沸かせた。中学生ながら時に棋戦が夜半に及ぶ事は労働基準法に抵触しないかという疑念も出て、棋士は個人事業主で18歳以下

の深夜労働を禁じる規定の対象外だと説明された。⁸⁰⁾ 未成年者の深夜対局に対する現代の社会的な懸念と照らせば、11歳の橋本を未明の4時半過ぎまで拘束した木谷實の大長考は配慮を欠く事に為ろう。坂田栄男は13歳時の入段手合で先輩院生の徹夜長考の謀略で体力負けし入段を逃し、その苦情で翌1934年から選抜戦にも持ち時間制が設けられ彼は晴れて目的を達成した⁸¹⁾が、窮地脱出の為の木谷の徹夜長考は最善を追求する純粹な忘我で卑怯な盤外作戦ではない。相手が子供や数段格下でも手を抜かない厳しさは弟子の加藤正夫にも引き継がれたが、小学生の我が子とも真剣勝負し余興も本業並みの専心で臨む橋本の性分は木谷譲りである。今の中国なら橋本に冠された美名の「天才少年」の方が3時間半の集中を苦にせず、逆に不惑の40歳に近い棋士は黄金期を疾うに過ぎ徹夜対戦に耐えられない恐れが有る。日本の囲碁人でも対局が朝方まで続く事や1手に3時間半考える事は異例中の異例で、純真無垢・天真爛漫な木谷のこの逸話も唯一無二の珍局に違い無い。大家に長考を強いた橋本が長考癖に染まり梶原まで移った事は木谷の影響力を思わせるが、世間の就眠時間帯に3時間半も1つの難問を解き続ける集中力は、高い専心度(造語)が条件・身上と為る専門家・專業者の真骨頂を示している。

『現代囲碁大系』第27巻『藤沢秀行下』(本人解説、京野秀夫執筆、1982)所収の第2期棋聖戦挑戦手合七番勝負第5局(78.3.1~2, 福岡県北九州)は、「流れを変えた一局」と題する解説の通り、「藤沢の記念すべき一局であろうし、この七番勝負も語りつがれ、並べ続けられる棋聖戦の、いや囲碁史の一ページであるはずだ」。52歳の棋聖は角番の絶境から22歳年少の挑戦者への逆襲を敢行し、際疾い攻防の末に131手の短手数で「殺し屋」のお株を奪い、中国でも昭和第一の「屠龍(大石撲殺)局」として知れ渡る会心譜を作った。「凄まじい一局だった。序盤優位に立った藤沢は、並の勝ち方では満足できないと、あえて危険を承知で大石を撲殺しにいき、どちらが読み勝つかの力比べに持ち込み、集中力の勝利。/ここらが長年白刃の下をくぐってきた勝負師の面目。」皆殺しの第1歩として1時間1分費やした黒47の強手で隅に活かすのを拒否し、黒49の封鎖を見て加藤は「ワーッ」と声に為らない悲鳴を上げて考え込んだ。最高位者の進退を賭けた死闘は「大難解戦、大捕り物帳」へと展開し、太らせて取る総攻撃は黒91(37分)・白92(22分)の次の黒93が決定打と為り、2時間57分の長考が早打ちの藤沢としては大幅な記録更新である。「この三時間になんなんとする読みの内容は百万語、数百の図を示しても述べきれものではない。」約2時間の長考で応じた白94は黒の読み筋に入った敗着で、黒95・97の味の良い止め等に至って、「藤沢の目論んだ全身、全能、全力をあげての読み合戦はここに軍配が上がったのである。」「戦い終えて加藤は、/“酷い目にありました。殴り合いというのはこちらも幾らかのパンチが入るんだけど、殴られっ放し”。1歩間違えば即敗北に為りかねない読み比べは全身全霊・全知全能の全力全開を要求し、黒93の10620秒や木谷實対橋本昌二少年の1手の21600秒に亘る膨大・濃密な思考は、仮に中

身を1語も漏れずに文字化すれば多分些かの誇張も無く百万に上るであろう。

藤沢秀行は『勝負と芸——わが囲碁の道』第5章「秀行の盤上談義」第4節「何手まで読めるか」で、**プロ**棋士に関する一番難しい質問に対し実感に基づいて答えている。石田芳夫の「一目千手」説は強ちハツタリでも**法螺**でもなく、例えば**征**（相手の石を斜めに1手も空かさず当り、当りと追い詰めて逃げられなくする取り方）の場合、盤端まで追い掛ける進行は30～40手は読んでいる計算に為り、**アマチュア**でも有段者なら**征**か否か一目で判り読みを他の変化に切り替えるから、基本線とそれに含まれる変化だけでも100手くらいは誰だって読めるのだと断じ、**プロ**棋士は子供の時から手を読む訓練をしている為500手や千手は読めても不思議は無いと説く。但し相手の応手が分からないから1手でも読めない事も有ると断った上で、初心者と**プロ**棋士の読みの違いは歩行のみと自動車や飛行機の利用との差であると言う。「**プロ**でも読みの質と量は一樣でない。ふだんの修練が違うし、人生観や世界観によって、同じ場面でも、異質な読みが生まれてくるのだと思う。/思いつくままにあげても、木谷先生は読みの量がケタはずれだった。そんなにまで読んでいたのかと、驚かされることがしばしばだった。坂田さんはちょっと違い、そんな手まで、という読みである。林海峰君はおそろしく先まで読んでいながら、石橋をたたいて渡らず、安全な手に戻ってしまう傾向がある。各人の読みが一致しないから、碁は面白い。」**棋力の根幹を為す読みに於いてアマチュアと量・質とも次元が違うプロ棋士の本領は、修練の密度・内容だけでなく囲碁観の根底の人生観・世界観も絡んで来るが、木谷實・坂田栄男と林海峰の類型・傾向の違いには国民性の関連も見取れる。**

逆に双方の読みが一致する例として坂田栄男と闘う名人戦番碁の1局を挙げ、2日目の夕食近くになって大きな寄せが各所に残っている場面で、終局まで100手以上の寄せを懸命に読んだ処どうも盤面で5目しか勝てないが、夕食後再開すると坂田は予想した通りに打って来、結局見通しの通り5目の**コミ**出出して持碁と為り、持碁は黒負けとする規定に由って自分が敗れた。更に「**当世極妙碁**」の美称が付く名局中の名局として、若き日の本因坊丈和が安井仙知（知得）に黒を持って2目勝った碁を例に取る。丈和が101手目で3時間の長考をして2目勝ちを読み切って、仙知も102手目で2目負けを読み切って、何とか1目負けにする事は出来ないかと同じ3時間の長考で苦心したものの、遂にそれを発見できなかったと言う。藤沢秀行は後人を喜ばせようとする作り話と決め付ける向きには否定的で、気合が入っていれば早い段階でも終局までを見通せるとし、この時の両者は千手単位であらゆる変化を読んだのかも知れないと推論する。気合から加藤正夫との棋聖戦で黒93の大長考の膨大な量の読みも引き合いに出され、自分の頭を**スーパー・コンピュータ**に繋いで中身を画面に表せたら面白い図が**ごまん**と示されたであろうが、「こんな局面を読み切るには、充実した体力と気力が不可欠。長い棋士生活でも、数えるほどしか経験がない」と語る。棋士に限らず**絶好調**とは心・技・体の全面的・高度な充実と相応の成果に他ならないが、現役時代の58年間中の限られた**完全燃焼**は大勝負の**産婆**及び**所産**と言

えよう。

中山典之は処女作『実録囲碁講談』（日本棋院機関誌『囲碁クラブ』1975年8月号～77年
 正月号、抜粋初版＝日本経済新聞社77年刊、完本＝岩波書店2003年刊）の第2話「戦慄の譜」
 第1節「細心にして周到」で、対局姿に見た「人間木谷實のあまりにも細心な、神経質とも思
 えるほどの用心深さ」を描く。記録係を担当した千に近い対戦の中で**最も心を動かされた局**の
 1つに、第2期最高位戦第4局（1957.2.28～3.2）が有る。坂田栄男に木谷が挑戦する**込無**し
 の五番勝負は第3局まで白番勝ちが続き、1-2と負け越して後の無い坂田は白番で本局を迎
 えた。世にも恐ろしい形相で盤面に喰い付き、1手1手に**血の滲む様な努力**を払ったが、追い
 詰められた**焦燥感**が序盤からひしひしと伝わって来る。著者はこの時に初めて**一流棋士の気迫**
 を肌で感じたが、木谷の方には案外のゆとりが感じられ、鬼才坂田を**角**に追い詰めて**止め**の
 打撃を見舞うという**霧囲気**ではなく、**後輩坂田と斯くも真剣な碁を打てるのは無上の快心事**だ
 とでも言っている様に見えた、と記す。第2節「満座声もなし」は黒77を取り上げ、この手
 を打つに当ってこの先37手目に生じる一手寄せ劫（1手掛けないと本劫〔石の死活や断続を
 左右し全局に影響を及ぼす本格的な劫、どちらからも1手で解消できる〕に為らない劫）を読
 み切り、自軍の劫材有利を確かめてその一手寄せ劫を争う決意を固めていた、と語る。感想戦
 で観戦の棋士から白78の変化図に対する応手を訊かれると、「その手は、少し読んでみたんだ。
 どうも、ヨセコウになるらしい」と答えた。何処でどの様に寄せ劫が生じるのか全く見当が付
 かないので一同キョトンとしたが、木谷は即座に想定図の黒1～39を並べた。坂田は「へえー」
 と甲高い奇声を発して絶句し、半徹夜で観戦していた高川格・山部俊郎が互いに顔を見合せ（『昭
 和囲碁風雲録』第18章「続々と新棋戦」第4節「大豪木谷の復活」では、余り丈夫でない両
 雄も夜半の終局後まで場を去らず、感想戦で木谷の構想披露を聞いた時に顔を見合せ、呆れた
 ねという様な表情をしていた、と為る）、腕に覚えの有る若手棋士**ども**も声を呑み、20人ほども
 居る部屋がシーンと静まり返った。「無理筋みたいな一手ヨセコウだが、黒がコウ材豊富で面
 白い」等といった控え目に述べる木谷の声を、中山は**道策の声とも天の声とも聞いた**。白4・
 黒23等のなかなか発見できぬ妙手さえ含まれているから感心されたが、後に高川は「あのよ
 うに先の先まで読まなければ碁が打てないものならば、僕らは碁をやめるしかないね」と語っ
 たので、**読みの深さに於いて木谷の碁は当代随一**であると中山は断定した。

木谷實の桁外れの量の読みは脳力・能力の限界に対する並外れた挑戦と言えるが、**限り有る
 最盛期乃至棋士生命を以て囲碁の無限の可能性を探究する求道者は、体力・気力の過度な投入
 で人生の持ち時間を早く費い果してう恐れが有る**。春秋・戦国時代（前475～前221）の思
 想家**荘子**（荘周、生歿年不詳）は『荘子』「内篇・養生主」で、「吾生也有涯、而知也無涯。以
 有涯随無涯、殆已。」（吾が生や涯り有り、而して知や涯り無し。涯り有るを以て涯り無きに
 随う、殆うき已）と、**一個人の力で全ての真理を窮めようとする無理な追求に対して善意の**

警告をした。碁に熱中する人を表す和製漢語「碁狂」や和語「碁気違い」（俗に「碁キチ」）は、元々国語辞書には無く平成以降は「狂」「気違い」の差別語扱いで死語化しつつある。女流棋戦優勝4回（1979・80・86・87）の小川誠子（1951～，95年六段）は、随筆集『囲碁つれづれぐさ』（講談社，87）の第3章「素晴らしき碁キチたち」の中で、自ら触れ合ってきた各界の熱烈な囲碁愛好者の心酔ぶりを讃えている。第15節「米長先生のさわやか流」で取り上げた米長邦雄（1943～2012，79年九段）は、趙治勲に3子で勝った程6段の実力は優に有り、囲碁好きの棋士が多い将棋界の中でも一、二を争う碁キチに入ると言う。準名人まで進んだ安井家八世の知得仙知が大好きで息子に「知得」の名前を付けた事は、自身が生れた時に在位中だった初代実力制本因坊関山利一の号「利仙」と同じ由来だけに、異分野の古代碁豪に対する傾倒は確かに粋狂の印象を与える。棋戦・人生の両面で「異常感覚」を露出した藤沢秀行との意気投合も合点が行くが、破天荒な言動で周囲を瞠目させる事の多い2人が最も輝く昭和末期を過ぎた後、両棋界の優等生生産と似合う様に「碁キチ」も褒め言葉としては控えられ勝ちである。新世紀初頭の『日本国語大辞典』には『広辞苑』等で不採録と為る「きち」は残っているが、「〔語素〕（“きちがい [気違]” の略）上に語を伴って，“～の病的なほどのマニア”の意を表わす。“カーきち”（自動車マニア），“音きち”（ステレオマニア）など」という説明には、「気違い」の狂気・乱心と通じる「病的」な熱中に対する冷やかな見方が感じ取れる。中国では「棋迷」と共に可く言う「棋痴」は特に「痴人」等の負の響きが無いが、「白痴」「痴呆」等を構成する「痴」の「疒（病垂れ）+知」の字形は、知的な作業に病的なまで執着する事の危険に対する注意喚起として妙味を帯びる。先秦時代（前221年の秦に由る統一国家成立以前の時期）の諸子百家の中で、対極に在る儒家（儒教）と道家（道教）は二大学派を為した。後者の祖である老子（本名李耳，生歿年不詳）と同時代の荘子の老荘思想は、「孔孟之道」（孔子・孟子の理念）の現実主義・進取精神とは逆の虚無・恬淡・無為の姿勢を唱えたが、『論語』「雍也」に見える孔子の「知者楽水，仁者乐山。知者動，仁者静。知者楽，仁者寿。」（知者は水を楽み，仁者は山を楽む。知者は動き，仁者は静かなり。知者は楽しみ，仁者は寿し）は、儒・道の共生と価値・趣向の多様化を許容する。『中庸』で「三達徳」（世の中で普く通じる3つの徳）と言う智・仁・勇の内の2つは、知者と仁者の嗜好・志向・傾向に特質が現れる。盤を挟んで向き合う木谷實と呉清源の多動と不動は「知者」と「仁者」の対を為すが、碁の世界に浸った木谷の愉楽と呉の長寿も儒家の教祖の図式に当て嵌る。

盤外之敵——生・老・病・死「四苦」の脅威

高川秀格は『秀格烏鷺うろばなし』の「苦闘」章の第8節「棋士ランキング」で、呉清源の十番碁の最後を飾った対戦（1955.7.19～56.11.27）を振り返って、星の上では4勝6敗とした

ものの第8局で先相先(せんあいせん) (3局の内1回下手が先番[黒])を持ち、後2局は互先(たがいせん) [技量(こ)互角の者同士の都合割、交互に先番を持つ。相先] で打つ手合割) に打ち込まれた結果に就いて、相手の強さには全く閉口したものであると嘆いた。絶頂期の呉と坂田を比べてどちらが強かったかという多くの非(アマチュア) 専門者の質問に対し、呉の強さは神(が) 憑(か) っていたが坂田の強さは人間らしく生(なま) 々(なま) しかった、自分は一応呉一坂田として置くが、非(アマチュア) 専門者が大好きな番付は獅子(ライオン) と虎(とら) とどっちが強いかという議論に似ている、と書いた。怪しい番付として1956年頃に高橋重行五段(旧名(しげぞう) 重三、後(としみつ) に俊光に改名、1906~75、62年七段、追贈八段) が作った物(やりだま) を槍玉(やりだま) に上げ、彼の好みで渋い芸風の島村利博が1位に為り自分は10位にも入らない、という選び方に不服(にお) を匂(にお) させた。五段時代の1936年に高橋四段と『打倒新布石』(誠文堂新光社) を共著した村島誼紀も、同じ時期に一流棋士の番付を座輿に考案し、高川に「もっとまともで常識的」と評された。実力方面では1~7位は呉・坂田・橋本宇太郎・藤沢朋斎・木谷實・島村・高川、心境面では高川・呉・橋本・島村・木谷・坂田・藤沢の順で、実力7位は残念至極だが、心境面で呉の上に置かれたのは胸を張(よ) って可(よ) い、と言うのが1956年の防衛戦(6.6~8.1) で島村を4-2で下し、5連覇達成に由る名誉本因坊の資格を獲得した秀格の感想である。両面の平均点では呉が1位、橋本が2位、高川・坂田が3位並列、島村・木谷が5位並列、藤沢が最下位に為るが、木谷は直ぐ下の藤沢と同じく高川が「一徹の人」と見た様に親縁性(お) がある。

『秀格烏鷲(うしゆ) うろばなし』第4章「夢の本因坊」の第7・8節「初防衛に成功」「一徹の人」に、木谷實の挑戦を4-2(しりぞ) で退けた闘(しりぞ) い(1953.5.18~7.8) の感触として、堅実この上無い木谷流に思想の偏在が目立ち、それが昔気質の碁の弱点だったという辛口の評がある。木谷は翌年から脳溢血で2年ほど欠場し再起不能(あや) と危(あや) ぶまれたが、見事に復帰し大豪ぶりを発揮して第11~13期で何れも総(リ-グ) 当(リ-グ) り1位(並列) に進んだ。3年連続で同率(プレー-オフ) 決(プレー-オフ) 戦に敗れた後の単独1位を以て挑戦権を取ったが、同じ2-4(スコア) の得点で最後の挑戦(1959.6.12~8.6) を終えた。主要棋戦の優勝歴が無く挑戦3回中の最初の第4期本因坊戦は悲運(あや) の起(あや) 点(あや) と言え、岩本薫和に挑む接戦の敗退(1947.10.20~12.28、2-3) で勝負強(あや) さの不足(あや) が現れた。高川秀格は「不滅の九連覇」章の第2節「再度、木谷さんと」の回顧で、内容的に優位に立った相手が第5・6局で疲れが出て精も根も尽きたと記す。「木谷は古武士で、柴田勝家みたいに一徹で、碁に頑固だった。」病氣療養の後「打ちたい」と言い出し、家族と棋院関係者の反対を押し切って復活した。「この一徹のさむらい大将が、こと盤に向かうと遊びの精神をたずさえていたのだから驚く。」師匠の久保松勝喜代は「勝負とは関係のないことを考えている」と木谷を評したが、「つまりたとえば、前に打った石が一路違えば今どうなるか、というようなことをコンコンとヨミふけるのである。これはまさに眼前の勝負とは関係ない遊びの精神である。一所懸命に打っている。でも、同時にたのしんでいる。その境地がうらやましい。今はもう、そんな碁打ちはいない。」困碁(プロ) の專業制度が日本で発足して以来の400年余りに於いて、後発の韓国・中国等も含めて棋士の

人数は延べ4桁に上るが、長年の公式戦で囲碁の遊戯と競技の両面を鮮烈に体現した一流棋士は、江戸に遡っても世界中を捜しても木谷しか見当らない。

木谷實の2度目の脳溢血ひきがねの引金と為った対局の観戦記（『毎日新聞』1964.1.26～2.2）は、ひと一昔の高手番付で彼と相手の高川格に独自の評価を下した村島誼紀が書いたのである。第1譜（1～17）「木谷流のハサミ」は異例の病状報告から始まり、「木谷はこの対局の途中で気分がすぐれず、休憩時間中は隣室で横になっている有様であったが、打ち終わって極度の疲労の結果、その夜は日本棋院に泊まり、翌日家族の人たちの介添えて自宅に帰ったが、極端な低血圧で食事ものどに通らず、ついに東大病院に入院した。」「二日目の午後あたりから、盤上以外は何の記憶もないということであるから、よく打ち上げたものだと思う。全く気力一つで打ったものであろう」と語る。第4譜（57～75）「上辺の白不安定」は2日目の最初の部分で、「木谷はこの日は朝からすでに気分が悪かったらしい。一局の碁に投入する棋士の消耗は、恐らく棋士以外にはわかってもらえないであろうが、二十時間もの長い間、寸分のスキなく緊張をつづけなければならぬのだから、その精神的負担は大変なものである。対局中陽気に冗談口などをたたいているのは、苦しいための気分の発散とも見られるのである。/木谷さんなども対局態度は陽気な方だが、恐らく盤面に傾倒する全精力の打ち込み方では、人後に落ちない人であろう」と言う。中山典之は『昭和囲碁風雲録』の「高川秀格の時代」で、藤沢朋斎の最強手に拘る志向や徹夜で敗局を並べ返す一徹さに関する『秀格烏鷲うろばなし』の評の引用に当って、「棋士を語る時、棋士に如くことはあるまい」とし、「高川秀格氏は相手を客観的に観察することにかけては第一人者。形勢判断の名手であり、評論家でもある」と称える。秀哉師たたの懐刀ふところがたなと日本棋院の知恵袋と呼ばれた村島は、坊門の纏め役として棋院の創立に貢献し運営の重役も長年務めた。同門の前田陳爾まえだのぶあき（1907～75、63年九段）等と同じく観戦記を多く執筆した事は、日本の囲碁・囲碁文化の一大特徴を為す新聞碁・観戦記の発達や、昭和の一流棋士に多い文筆表現の意欲・才能を現している。彼は本因坊戦の観戦記を1952～79年に主催紙に発表したのが、大手合制度の確立の他に本因坊戦の設立にも大きな役割を果たしただけに意義が大きい。

戦後の呉清源—藤沢庫之助打込十番碁を記す『昭和囲碁風雲録』第16章第3節には、棋院編集理事の藤沢の圧力で『実録囲碁講談』の連載が18回で打ち切られた話も有る。機関誌にまだ幕下の四段が長期連載物を書くのは読者に対して大変失礼だと言われて、『囲碁クラブ』の名編集長田中宏道ひろみちも遂に音を上げ「総指揮官の理事殿」に白旗を掲げた。ところが何日か経って棋院総裁（第5代、1974.7.17 [棋院創立50周年]～82.8）の田實渉たじつわたる（1902～82）に偶然会い、自分はその文章の大愛好者で出来れば永久に続けて下さい、これは総裁命令として受け取って下さい、と言われた。何故『棋道』への寄稿や単行本を書かないかという「叱言」の注文を聞いて、財界の超大物（三菱銀行頭取・会長等歴任）に同行した斎藤は直ぐ賛意を表し、後日の編集会議で『棋道』誌にもその連載をと言い出した。同誌の村上明編集長が首を捻りながら「中

山さんはかなり頑張っているようですが」と言う、「朋齋先生は、ここで色をなしてきめつけた。/ “村上君、かなり頑張るとは何事です。中山さんの文章は君などより聖目も上だ。言葉遣いに気を遣い給え” / 今や、朋齋先生は、中山の方が川端康成より上だと信じているらしいのである」と皮肉っぽく語る。最も筆が立ち文筆活動の実績が多い彼の文人棋士は偉大な先輩の当初の偏見に就いて、「確かに盤上では朋齋先生から見れば幕下だが、文章の世界では違うのだということを先生はご存知なかった」と不服を吐露し、「囲碁界で見るべき文章を書ける人はごく少なく、強いていえば故高川秀格先生と趙治勲先生の文に才気が感じられるくらいのものだ」と自負を込めて決め付ける。彼が描いた盤上の風雲や棋士の横顔、碁界の内情も同業者だから臨場感と説得力が有るが、村島誼紀の木谷實 vs. 高川局の観戦記も 43 年の専門歴や、数年前に終局後の一休み中に脳貧血を起して失神した自身の体験に基づいて、棋戦の実態と棋士の生態、対局者の人間模様と同輩 (2 歳年下) の木谷の個性を、真に迫る描写と実情を踏まえ且つ感情移入を交えた論評で伝えている。

高川名誉本因坊は『秀格烏鷲うろばなし』の「苦闘」章の第 1 節「わが生涯最良の年」で、1 等実りが多い 1954 年に 39 歳の自分は人生の絶頂を迎えていたのかも知れないと回顧する。先ず 1 月に第 1 回 NHK 杯戦 (ラジオ NHK 第 2 放送) で準決勝 (決勝で島村利博に半目負け)、5 月に第 1 期日本棋院選手権決勝 (一番勝負) で篠原正美七段を破り、7 月に本因坊防衛の大苦戦を制して同棋戦初の 3 連覇を果し、10 月に 10 年ぶりの昇格で八段に進み、第 2 期王座戦決勝で宮下秀洋八段を 2-1 で下した。前年は王座戦・日本棋院選手権戦・NHK 杯戦の誕生に由り戦後第 1 次棋戦殺到の年と為り、本因坊を含む 4 棋戦の内 3 冠を手中に出来、全棋戦制覇まで半歩しか無い結果は喜ばしい。39 歳の誕生日 (9.21) を挟んだ戴冠・昇段は木谷實伝説の「38 歳の男盛り」を想起させるが、第 2 節「九連覇中、最大の危機」には明・暗の移り変わりや相互内包の闘劇 (造語 = 闘いの劇) が見られる。本因坊を持ち堪えた 9 年中の最大の危機と為る第 9 期 (5.16~7.17) では、初めて迎えた年下 (5 歳年少) の杉内雅男を 4-2 で退けたものの内容が紙一重である。「千尋の谷を綱渡りするような場面が一再ならずある。危機を乗り越えりきり、うまく向こう側へ渡り切ったことを、天が与えてくれた幸運と呼ぶか、それこそがみずからの実力と自負するか。」第 5 局で長考の末に打った黒 95 が無意味の大失着で、落胆し後何手で投げようかと考えていた内に相手の白 100 の誤りで息を吹き返し、後にも敵失に助けられて地獄から這い上がった。第 6 局もどう仕様も無い悪い碁を必死に追い上げ、微差の辛勝で連覇街道の曲り角を通過する事が出来たが、第 3 節「逃げ出したい気持」では勝利の美酒に有り着くまでの受難の苦汁に触れる。

曰く、苦しくなるのは 2 日目の午後からから夜に掛けてであり、この際の苦しさは形勢が悪いか肉体的にしんどいというのと一寸違い、マラソン走者が 35 キロ辺りを走る時の気持と似ているかも知れない。「夕食休憩時など何でこんな職業を選んだのかと、わが境遇をなじって

みたりする。打っていて、“もうどうでもいいや”と、石を放り出して盤から離れたい。精魂こめて打つほど、その願望が強くなる。しかしその苦しみを乗り越えることが、私たちの職業では絶対条件なのである。」高川秀格は6年後の対杉内雅男の防衛戦最終局で粘り抜いた後、自分の失着(白168)と半目負けを自覚した相手と違って終局時に勝敗が分らなかった。打っている最中は幸福感の欠片も無く、終わった直後は虚脱感に襲われ勝ちであるが、雑誌に寄稿した局后感想は「途中で苦しくてたまらなくなり、もう打ちつづけられない、どうとでもなれと思う。その一手手前で踏みこたえ自分を克服する精神力を持ち続けていくことが大事」と書いた。棋戦では心・技・体の総合力を以て盤上で相手を負かさなければならぬだけでなく、技量発揮の妨げに為る時間の制限や環境の影響、外部の雑音を乗り越える必要も有り、更に感情・衝動を自制し雑念・邪念を排除する克己も不可欠である。王陽明(1472~1528, 明の大儒・政治家)は「破山中賊易, 破心中賊難。」(山中の賊を破るは易く, 心中の賊を破るは難し)の逆説で、山中に籠る賊徒を撃破するよりも心に宿る邪気を駆逐する事が難しいと唱えた。『論語』「顔淵」に見える孔子の「克己復礼為仁。」(己に克ちて礼に復えるを仁と為す)は、私欲に打ち勝ち礼儀を履み行ふ様にする道德復権の主張とは別の角度から、思いの邪を無くす精神修養の実践としての囲碁の効用を連想させる。囲碁由来の最古の四字熟語「拳_レ棋_レ不_レ定」に対する否定と「専_レ心_レ致_レ志」に対する肯定は、迷いを断ち切る要求も誘惑を追い払う姿勢も己に克つ心構えに帰着できよう。

高川格は長年の持論だった「棋士50歳限界説」を自ら覆す形で、53歳時の第8期(旧)名人戦で27歳年少の林海峰から4-1で奪冠した(1968.8.21~10.4)。『秀格烏鷺うろばなし』第7章「最後の花」第4節「ねばりにねばる」の詳述の通り、この最後の勲章は相手に負けない粘着力で対抗し死力を尽した賜物である。粘り強い「二枚腰」の林に勝った事はその師の呉清源から「三枚腰」と讃えられ、老いて益々壮なる活躍は報道界で「不死鳥」等と書き立てられたが、第5節「力の限界」の追憶の様に次期の失冠から下り坂へと転じて行った。「タイトル戦は二匹の闘犬が二日にわたって、対局場というオリに入れられているみたいなものだ。昔は十時間だから双方で二十時間、今は九時間持ちの十八時間。この間、気を抜くとやられる。碁に食いついていかなければならない。相手の持時間をとことん利用しないと、遅れを取る。/勝敗を分けるものは何かというと、ただ一つ、二日間にわたって手をヨム、ヨミの総量、総和が問題なのである。感覚や直感なども含めてヨミの総量の大きい方が勝つ。相手の一步先、半歩先をヨんだ方が勝ちなのである。少なくとも私の場合はそうだった。その緊張を支えるのが、いわゆる精神力というものであろう。/体調の悪いときは、緊張を支える精神力も、ヨム体力も半減するから、碁は勝てない。」言い換えれば健全な読みを支える健全な精神力は健全な体力を担保と為すので、第8期の防衛戦(1969.8.21~10.14)第4局(東京中央区築地新富町「躍金旅館」, 9.18~19)の打ち掛けの夜に引いた風邪の長引きで、2-1の優勢を失い3連

敗で選手権を挑戦者の林に返上した。時間をたっぷり余してあっさり土俵を割ったのは緊張の糸がぷつりと切れたからで、こんな時は人に言われても自分に言い聞かせても容易に立ち直れないと言う。

高川格が林海峰名人に挑む際の戦前の予想は当然の様に林乗りが多かったが、同情票が一部有る高川乗りの中で三好徹が明快に彼の勝ちを断定した。⁸²⁾彼の文筆家は『五人の棋士』の第5篇「盤外の敵——石田芳夫」(初出=『小説新潮』1974年1月号)の中で、同じ名人戦決勝を舞台に体調と精神力が行方に及ぼす重大な影響の好例を挙げている。石田は第26期本因坊戦で史上最年少の22歳10ヵ月を以て林から奪冠し(1971.4.26~6.22, 4-2), 第27・28期(72.5.8~7.7, 73.5.8~6.12)で林の挑戦を4-3, 4-0で退いた。3回目の3局目の直後に麻雀の相手をした三好は「あと一息という感じでしょうね」と水を掛けると、勝者は4局目を負けると逆に4連敗の恐れも有ると言って楽観論を一蹴した。次局に臨む彼の気合は勝負所の高川を彷彿とさせる様に最も横溢し、棒勝ちを成し遂げたが、「勝負というのは片寄るものなんですよ」とさらりと言って退けた彼は、皮肉にも圧勝後の第12期旧名人戦(1973.8.28~10.20)の中盤以降の棒負けで持論を立証した。立ち上がりから疾風枯葉を巻く勢いで林に3連勝を収め、前年以來の対戦成績を9連勝に伸ばした石田は絶対的な優位に立つが、林の負け方は独りで相撲を取って独りで転んでいる趣が有り此処で大悟一番した。「たとえていうと、林は大金を落しても、決してクヨクヨしない。/“あのお金は、はじめから持っていなかったのだ”/と、彼は自分にいきかせるタイプである。そういう精神力は抜群である。/四局目の対局場にあらわれた林の表情は、人びとが驚いたほどに明るかった。もともと名人位などは持っていなかったのだ、と思えばいいわけである。/つまり、林は無心の境地にあった。/この無心が彼を立ち直らせた。二百六十二手でジゴ。規定により、白番の林の勝ちである。/続く第五局は、黒番林の完勝に終り、第六局は、またもや林のジゴ勝ちである。勝負の波は、林のものになっていた。」最終局で投げた時の石田は別人の如くげっそりと痩せており、精も根も尽き果てた様な印象を受けた著者は、彼は盤上の敵ではなく盤外の敵に敗れたのだと見る。石田は第五局(10.2~3)の前にゴルフ場で俄雨に遭い風邪を引いた事で体調を崩しており、勝負は微妙なもので体調不十分では勝てないのが当たり前だと言いつつ切る。

村島諒紀の心境面番付に倣って昭和後半の一流棋士の自己制御の精神力の順位を考えれば、昭和の折り返し地点に近い1965年に主要棋戦で若輩制覇の先陣を切った林海峰は、往年の高川秀格名誉本因坊や「昭和の碁神」吳清源師並みの最上位級に為ろう。高川・林と同じ伶俐な頭脳・冷静な性格・均衡型の棋風を持つ石田芳夫は、坂田栄男から「クール、クレーバー、正確無比。しかも計算の速さは抜群である。寄せになれば負けないぞ、戦いの要素として、数字をクローズアップさせた功績は大きい」と称賛された。地の計算に熱心で且つ正確無比の特技に由って高川から「電腦」の異名を付けられたが、電腦が病毒感染で壊れるのと似て棋豪は

病毒等の所為で体を壊す事が有る。韓愈の名言に「樹欲静而風不止」(樹静かならんと欲すれども風止まず)と有り、対句と為る下の「子欲養而親不待」(子養わんと欲すれども親待たず)の感嘆に対して、木が時々風に吹かれて揺れるのに譬え安寧の望みが屢々邪魔される事を表す。英語の risk に当る中国語の「風険」は和訳の「危険性」と比べて、風の如く可く発生する在り方を字面に表しているが、「風」に因んだ和製漢語の「風邪」は天災の様に不意に遣って来る厄介な邪魔で、俳句の季語と為る冬に猛威を振うとは限らず、病毒の暗躍や免疫力の低下等によって年中罹る事が有り得、棋戦の際にこの邪な病で実力の発揮を阻害されるのは不運としか言い様が無い。

詩人・童話作家の宮澤賢治(1896~1933)は詩「雨ニモマケズ」(31.11.3)の冒頭で、「雨ニモマケズ/風ニモマケズ/雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ/丈夫ナカラダヲモチ/慾ハナク/決シテ臆ラズ/イツモシズカニワラツテキル」と人物像を描写し、又「東ニ病氣ノコドモアレバ/行ッテ看病シテヤリ/西ニツカレタ母アレバ/行ッテソノ稲ノ東ヲ負ヒ/南ニ死ニサウナ人アレバ/行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ/北ニケンクウヤソショウガアレバ/ツマラナイカラヤロメトイヒ」とその善行を列挙し、最後に「サウイフモノニ/ワタシハナリタイ」と自分の理想を表現した。結びの部分と手帳の同じ見開きに有る次のページの「南無無辺行菩薩/南無上行菩薩/南無多宝如来/南無法蓮華経/南無釈迦牟尼仏/南無浄行菩薩/南無安立行菩薩」の筆記と結び付ければ、東奔西走の救済行為の対象と為る仏教の「四苦」(生・老・病・死)が浮かび上がる。雨・風・雪・夏の暑さに負けない人間の強さはプロ棋士にも大抵備えてあるが、石田秀芳本因坊は雨に濡れて風邪を引いた事で実力制名人本因坊の獲得が1年遅れ、呉清源も山部俊郎も相当の寒がりに対局時に厚着で身を纏う事が多く、⁸³⁾ 橋本宇太郎は第3期本因坊戦六番勝負第2局(1945.8.4~6, 広島市外五日市吉見園・津脇勘市邸)で蒙った原爆罹災後遺症が尾を引いて8月の対局を苦手とする様になった⁸⁴⁾。原爆下の対局の挑戦者岩本の名前は「風薫る」の熟語に含まれるが、橋本揮毫の「風洗雨磨」は木谷實の「仁風」や島村俊宏の「萬古清風」と比べて、広域感染疾病の風邪や大量殺害兵器の爆風に由る危害と試練を思わせる重みがある。

橋本宇太郎は弟弟子の呉清源と2回の打込十番碁(1946.8.26~47.12, 50.7.25~51.8.9)を行い、第1次では8局目までの2勝6敗で先相先に打ち込まれ(残りの2局は1持碁・1敗)、第2次では3勝5敗2持碁で更に一段下に打ち込まれる不面目を辛うじて免れた。選りに選って戦後初の8月に始まり長崎原爆被災6周年の日に終わった20局の内、苦手な8月は4局(2勝2敗)、前後の7・9月は3・4局(1勝2敗, 1勝3敗)有るが、8月の戦績が互角でも盛夏・残暑の4勝7敗は終戦前の「8.6」受難の投影を感じさせた。初戦(東京世田谷区・若尾鴻太郎邸)は1944年秋に突如若界離脱を宣言した呉の復帰第1局に当り、世間の関心が高く報道の映画班が撮影に来たが、久しぶりに羽織袴で威儀を正し黒石を撮んだ呉の指が微かに震え

ていた。⁸⁵⁾ 5日前に岩本薫に本因坊位を奪われた橋本は失意の様相が微塵無く完勝したが、僅か2日間の休養後の再戦(東京新宿区牛込「河田会館」)では快進撃が途中から変調し1目負けした。白を潰す機会は山程も有り殺さなくても楽勝が目に見えただけに、両弟子の対決の立会人として別室に在った瀬越憲作は「破門ものだ」と嘆いた。続く9月の第3~5局(千葉県東葛飾郡野田町・茂木房五郎邸、京都市左京区南禅寺天授庵、同岡崎永観堂坂内義雄邸、対局日未詳)では一敗地に塗れ、第5局に至っては持ち時間を多く残して(各7時間の消費は橋本3時間12分、呉1時間25分)、131手の短手数で黒中押し勝ちと為り十番碁中最も呆気無く終わった。彼は健康を害して10ヵ月後の再開(神戸市甲陽園「播半」)で1勝を上げたが、同じ7月(日付未詳)の第7局を落し角番に立たされた。1日制が2日制に変わった第2次の橋本の7月1敗、8月1敗1勝、9月1勝は、「真夏の夜の夢」為らぬ「魔夏の良からぬ夢」(造語)の感は然程無いが、第6局(1950.11.22~23、静岡県伊東市「かにや聚楽」)では双方とも風邪が臨み、前日まで病床に臥した橋本(先番)が敗勢から勝敗混沌の局面に持ち込み、最後に持碁と為った結果⁸⁶⁾は体調不良者同士の拮抗の現れと見れば興味深い。

呉清源・橋本は数年後の「村島番付」の実力・心境両面で総合1・2位に為るが、早見え早打ちの2人は第1次打込十番碁の際に持ち時間各6時間の1日打ち切りを希望した。真面な作品を作るには少なく、万一にも遺憾な手が出てはなるまいと考えた読売新聞社の意向に由り7時間と為った⁸⁷⁾が、2~3日制が通例だった当時では空前の大幅な短縮は国際時代の先取りである。秀栄も1日打ち切りを正道とし秀甫と同じく相手が決り切った処で考えると機嫌が悪くなった⁸⁸⁾が、早碁が得意な藤沢秀行も国際戦の主流である3時間の様な短縮化に大賛成で、夕食休憩も不要と言う私見は近年の中国・韓国の一部の棋戦の昼食休憩廃の先駆と言えよう。『秀格烏鷲うろばなし』の「最後の花」章の「ねばりにねばる」には、50代半ばを過ぎた頃から力の限界を感じ始め、60歳に近付くと増々読みの力と形勢判断、目算が駄目になるという嘆きが有る。長考をして読む類型は年齢と共に落ち込みが激しく、直感型の人は意外と長持ちする様で橋本宇太郎等がその典型ではないか、という高川格の直観を証明する様に、呉は意図的或いは本能的な健康防衛の結果でもあるか100歳まで長生きし、橋本は87歳時の逝去まで現役を72年も続け加藤正夫等の後輩の大目標に為った⁸⁹⁾。総合5位並列の木谷實・島村俊宏と呉・橋本の良績・棋士生命乃至健康寿命の差は、技量の高低と共に完成度を追求する余り代償を度外視する職人氣質の所為も有ろう。疾病の「疾」の「病」「非常に速い」の意と「疒(病垂れ)+矢」の字形は、「光陰矢の如し」(由来と為る中国語は「光陰似箭」と結び付ければ、棋士を追い詰める時間逼迫の凶器じみた脅威が連想される。木谷は高血圧の持病に関らず常に早くも秒読みの連続に為る展開を導いたが、「1分碁の大家」の美称は殺人的な重荷を取って負う愚直な求道精神の産物である。脳力を蝕まれた「満心創痕」(「満身創痕」に擬えた造語)は歿年66の短命を招き、早見え早打ちの天才型を羨む高川格は体質虚弱の為68歳で退役し

71歳で没した。棋豪番付の「心境」「実力」に「体力」を付け加えるなら、心・技・体「三力一体」（造語）の総力戦の評価は若干違って来るかも知れない。

精密機械——棋士の「考える葦」の特質

宮澤賢治逝去の日に18歳と為った高川格も時々「恋人」の様に付き纏う風邪で弱った⁹⁰⁾が、虚弱そうな外観が有る細身の学究の形象は棋士の「考える葦」の有り形に似合う。仏蘭西の哲学者・数学者・物理学者パスカル（1623～62）は遺作『冥想録』（70）の中で、葦の様に弱い人間は思考力を持つ特性に由って弱さを自覚し、何も知らない宇宙よりも偉大な存在であると書いた。一吹き^{いってき}の蒸気、一滴の水でも人間を殺すのに十分だという自然界に於ける人間最弱の譬えは、一団の暖気・冷気や一陣の水流の音でも思考を乱され闘志を削がれかねない棋戦に当て嵌る。『1989年版・囲碁年鑑』（日本棋院）の記事「武宮、大竹の粘り退け四連覇/第43期本因坊戦（毎日新聞）」（松島利行）に、大竹英雄は1勝2敗で迎えた第4局（6.16～17、山口市徳山市「丸福ホテル」）の際、地元支部の大変な歓迎で「挑戦手合特有のイベント化した騒々しさにも居直る決意をしたらしく、暑がりやの武宮本因坊と寒がりやの大竹のクーラーをめぐる争いにも気を使わなくなった」と有るが、日本の「第5の季節」と言われる梅雨にも出番が有る冷房を巡る対立は勝負事の冷厳さを垣間見せた。同じ同門同士対決の小林光一对趙治勲の番碁でも室温の希望が食い違い、空調を順番で開閉を繰り返す方法で温度差の折り合いが付く様な展開⁹¹⁾は、各々の最適な条件で脳力・実力を発揮したい為に他ならない。江戸前期の俳人松尾芭蕉（名は宗房、1644～94）の名作には「古池や蛙飛びこむ水の音」（86）の他、同じく音声で静寂さを表す「閑さや岩にしみいる蟬の声」（89.7.11）と有る。後者が書かれた出羽国（今の山形市）と同じ山形県の上の山温泉⁹²⁾（上山市）の村尾旅館で、高川本因坊の初防衛戦の天王山と為る第3局（1953.6.5～6）が行われた時、木谷實は庭に在る人工の滝の四六時中流れ落ちる音が煩いとして硝子戸を閉めさせた。梅雨時なので酷く蒸し暑く「あつい、あつい」と言いつつも、係の者が戸を開けようとするや「止めてくれ！行かん、行かん」と制し、最後に滝を止める事で満足した。彼は音の邪魔に敏感で記録係の時計の音も神経を刺激する轟きの様に嫌っていたが、将棋の実力制第六代名人（1982年獲得、1期）加藤一二三（1940～、73年九段）も、選手権戦の番勝負で万全を期して宿泊施設で相手・立会人と共に対局室の検分を行う際に、精神集中の妨げに為る傍の人工滝を止めるよう要請する事が数回有り、国道沿い又は川・海沿いの部屋から景色が良くないが静かな部屋に替えた事も再三有った。⁹³⁾

中国の棋士も予備軍又は低段時代に棋戦の記録係を担当する事が少なくないが、棋譜の記載に熱心でない伝統の所為も有って中山典之の様な伝説的な名手は居ない。比較の対象として1歳年下の囲碁著述家朱偉（原名「本名」唯力、1933～）が思い浮かぶが、26歳で囲碁を始

めた愛棋家の彼は毛沢東時代の政治的な差別に由り定職に就けず、改革・開放路線始動の78年に初めて有りに着いた正規雇用の仕事が、上海の『囲棋』月刊(60～85年の中国唯一の専門誌)の編集者であり、その前後に天元戦(87年創設)決勝等の棋戦の「記譜裁判」(記録係・審判)を数多く務めた。1980年代に国家体育委員会(中央省庁)授与の1級(最上級)囲碁審判の資格を得て、試験配点の4割を占める棋譜記録では満点を取った。当該部分は試験官が速い速度で100手余りを並べて受験者に記させる形式であったが、高い対応力を持つ彼は難無く上海の37名の合格者に入った。1985年に中国囲棋協会(62.11.11創設)主催の全国優秀審判選考で4人中の1人に選ばれたが、同年の春節(旧正月)の翌日(2.21)脳溢血で記録機から遠ざかった。天元戦や中日天元戦(1985～2002)の依頼を辞退した後に新人王戦(94年発足)を2回担当したが、再度の脳溢血(90.6)の後遺症で200手以降に多い早打ちには付いて行けなくなった。⁹⁴⁾

囲碁の対戦は日本の「国技」相撲の格闘と似て心・技・体の総合力の対決であり、土俵上の力士の瞬発的な勝負決着に対して盤上の棋士は長丁場の競り合いを強いられる。中国では囲碁は智力競技・身体運動の性質に由り体育に分類され、全国運動会(国民体育大会)や中国主催のアジア競技大会の種目に入った事もある。選手権戦の1局で棋士の体重が2^キも減ると言われた消耗は立派な身体運動の証と為るが、頭脳競技国際大会の種目に有る同じ盤上遊戯の西洋将棋・象棋(中国将棋)と比べて、特に長い道程で長時間の競争を行う点で陸上競技の長距離走との類似性が高い。時には同走者と駆け引きをしつつ勝機を窺い勝負処で力を爆発させる長距離走の中で、囲碁は取り分け一流選手でも42.195^キの完走に2時間台が要るマラソンに似ている。マラソンは古代希臘のマラトンの戦(前450[一説に490]9.12)が起源で、伝令兵が約40^キを駆け抜けて元老に「我勝てり」と告げた後に力尽きて息を引き取った。第1回夏季五輪(1896.4.6～15、雅典)から盛んになったこの種目は由来が示す様に、戦争の勝負に絡み軍人も死なせる殺人的な一気疾走(「一気飲み」を振った造語)である。中国語の音訳「馬拉松」(mǎlāsōng)は「馬が松(の丸太)を拉いて走る」の意を持ち、囲碁対戦の一騎打ちは馬の輸送作業が比較できぬ重荷を背負った儘の苦難の強行軍である。高度の戦略・技巧を駆使して神経・肉体を激しく消耗する双方の総力戦に於いて、記録係は言わば撮影しながら同じく息抜きが出来ぬ伴走を続けなければならない。

朱偉は同じ「職業病」に侵された中山典之と似た碁界の語り部として、2016年に回想録『上海灘棋人棋事』(上海囲碁人の逸話)を上海文芸出版社より刊行した。題名が同音・文字相似の熟語「其人其事」(其の人、其の事)に引っ掛けた好著は、囲碁が最も盛んで一流棋士が最も多く出る都市の愛棋家・非專業強豪・棋士の群像を描き、1960～80年代の中国囲碁の復興→「文革」に由る低迷→「文革」後の中興の底流を示す。上述の日本使節団訪中交流戦の際の木谷禮子・王幼宸の「拳^レ棋不^レ定」の有様は、初心者時代の1963・65年に知人の審判係に数

十枚しか無い観戦入場券を貰って、上海市体育委員会構内の 籃球 訓練場での対局を上方の観客席から目撃したのである。第2次中日天元對抗賽（日本側の名称＝第2回日中天元戦、1989.8.23～24, 上海）の「記録裁判」を務めた体験談として、趙治勲天元が手洗いに立った隙を見てもう1人の記録係が小さい声で話し掛けて来て、長年の担当でずっと静かであった彼が声を抑えて言葉を交した処、沈思中の劉小光天元（1960～, 88年九段）が突然「不要説話！」（喋るな）と怒鳴った。人柄が温和な劉から大目玉を食った著者は衝撃を受け迷惑行為を自責した⁹⁵⁾が、趙も曾て対局を見学中の院生の私語に激怒しペット・ボトルを投げ付けたと言われる⁹⁶⁾。囲碁の異称「手談」は手で相対する事に由来し着手が無言の会話と為る意味も含むが、対局時の言葉の不用は思考の専心を妨げない点にも合理性が有る。『論語』「郷党」に見える孔子の「食不語、寝不言」（食らうには語らず、寝ねるには語らず）は、食事・就眠の際には完全な摂取や安静を保障する健康術の提言であるが、生理的な欲求を満たすこの2つの行為より遥かに神経を使う囲碁の競技では、外野の雑音ばかりか対局者も相手への邪魔に為りかねない言動を慎むのが作法である。朱偉は日本使節団の諸棋士の中で杉内雅男の対局態度に最も感銘を受け、若手に見られない様な終始端坐する折目正しい風儀は見做う可き手本だと綴る。⁹⁷⁾『秀格烏鷲うろばなし』の本因坊9連覇中最大の危機に関する回想でも、挑戦者の杉内は「芸道一筋の人」とし「碁の神様」の美名の講釈が有る。対局中は無駄口1つ叩くでもなく、第5局（1954.7.5, 箱根「環翠楼」）の時だったか、2日間に喋った唯一の言葉は2日目の夕刻の「電灯を点けて下さい」だったと言う。⁹⁸⁾

「棋士は、ある意味では精密機械である。ハナ風邪一つ引いても、蚊に食われた所が痒くても気が散って負けそうな気になる。家を出る前に女房と口ゲンカなどしたら、もう99%勝てないと思う。』『昭和囲碁風雲録』第26章「昭和から平成へ」第1節「星霜移り人は去る」に見える中山典之の断言は、対局者の交戦と記録係の業務の大変さを如実に物語っている。入室時から神経を磨り減らす様な緊張感で時に神経質に為る棋士の特異性は囲碁に限らず、自称「変人」の将棋永世棋聖米長邦雄が「奇人」と呼んだ加藤一二三も、棋王（1期）矢野直後の第16期十段戦第2局（77.11.7～8, 箱根「石葉亭」）の初日終了後、立会人の松田茂役八段（初名茂行、1921～88, 81年九段）に対し、対局室の敷物の色が濃過ぎるので明日は外して欲しいと注文を付けた。十数畳の和室の中央部に敷かれた濃紺の敷物の上で対戦の際には彼は違和感を覚えたが、宿の女将に抱るともう何年も同じ敷物で行っているのであった。両対局者が合意すれば撤去する事は何でも無いが、中原誠十段（1947～, 73年九段）は松田の打診に即答せず、暫くしてから「私はこれで慣れてるので、取らないでほしい」と返事した。将棋・囲碁観戦記者（1971年より読売新聞社、96年定年退職後無所属）・将棋著述家の山田史生（1936～2013）は、『将棋名勝負の全秘話全実話』（講談社＋a文庫、02）の第3章「奇人・変人・奇癖」第4節「波の音が気になると宿泊の部屋を変えた加藤一二三九段」で、勝負の途中で相手の言

いなりに対局場の設定を変える事は気合負けに繋がるから、此処は妥協できないという中原の姿勢は賢明だと評し、相手が気になるならその儘にして置くのが有り難いと思うのは当然だし、加藤は迂闊にも自分の弱みを敵に曝け出したと見る。松田と共同立会人の加藤博二八段 (1923～2013, 84年九段) が穏やかに説得した結果、挑戦者は「中原さんがそう言うなら仕方ありません」と納得したが、本局の中原の勝利は気合勝ちと言えようと山田は結論付ける。加藤は第3局 (11.16～17, 栃木県日光市川治温泉「一柳閣本館」) の前日に、川の音が気掛りで眠れないからと見晴らし・景色が良い川沿いの部屋を山側の部屋に移った。それを聞き付けた中原は「言われなければよかったんだけど、言われてしまえば私も気になるかもしれないので」と同様に変更した。同月29～30日の第4局 (静岡県熱海市「シャトーテル赤根崎」) でも加藤は部屋を替えたが、前年に同じ場所で対戦した時は好意で当てられた海沿いの部屋には不満が無かったので、普段なら心地よく聞える川の潺や海の波の音を敬遠する過剰反応は、無害の環境音でも調子が狂いかねない「精密機械」の過敏なまでに鋭敏な感覚に由る。

対抗心・集中度・高揚感が際立った今期の番将棋は翌年1月10日に中原誠が4-3で制し、加藤一二三は前年に続いて中原への挑戦に失敗し3年後の同棋戦で初めて雪辱できた。「しかし勝敗はともかく、加藤九段の比類ない集中力には毎局驚かされる。対局に入ると頭の中は盤上のことでいっぱい。ほかのことはまったく眼中になくなる。両ひざで立ち、高い位置から局面を見る。大きなセキ払い、ぶるんぶると鼻をならす、相手のうしろに立って盤上を見る——。これらの行動はすべて、無意識のうちにやっているとしか思えない。/その局面で最善手を探し出すことに全力を尽くす。持ち時間の減少は二の次。この集中力こそ、加藤九段が六十の坂を越えてもA級で頑張っていた原動力だと信じ、私はいつも感服と尊敬の念を持って加藤九段の将棋を見続けている。」第4節「十段戦を前に教会でお祈りをする敬虔なクリスチャン」の加藤像はこの様に始まるが、勝利へ導く武器として棋力と並ぶ集中力の発揮とそれに対する封殺が攻防の見所に入る。「終盤必ず秒読みになる加藤九段。中原十段が考えているのでその間にトイレに行こうとして立ち上がると、中原十段は、そうはさせじと、ビシリと指すのである。加藤九段はドタドタと足音も高く、息せききってトイレを往復。それをクールな目で見すえる中原十段。普段の温厚な立ち居ふるまいからは思いもよらない厳しい勝負師の顔が、このようにかがえるのは、担当記者の醍醐味でもあると言えよう。」第2節を結ぶこの光景には敷物を巡る対立と共に敵の不利を味方にする老獪さが現れるが、盤上遊戯の高手は相手の思惑を外す意地悪に智恵を使い果すから悪人は有るまい、という素朴な俗説は古今の世界囲碁史を見渡せば頷ける。中原は十六世 (実力制第五代) 名人 (1973～82年9連覇 [77年未開催], 85～87, 90～92年3連覇2回, 通算15期)・永世十段・永世棋聖・名誉王位・永世王座の栄光を欲しい儘にし、選手権獲得総数64期 (歴代3位) は加藤の8期 (9位, 2人並列) の8倍に当るが、2008年8月12日の王将戦2次予選準決勝でA級八段の木村一基 (1973～, 17年

九段)に勝った後、感想戦の最中に体の異変で病院に緊急搬送され脳内出血と診断された。囲碁棋士と通じる長年の極度な疲労蓄積と感想戦の本番に準じる重い負担を思わせるが、入院後の大腸癌発覚もあって治療専念の為に2009年3月31日を以て引退した。対照的に加藤は超一流陣と違って5棋戦の優勝は精々3連覇で名誉称号が付かないが、引退(2017.6.20)時に最高齢現役(77歳6ヵ月)・最高齢勝利(76歳11ヵ月)・現役勤続期間(62年10ヵ月)・通算対局数(2214)等の歴代1位と為った。

2018年2月13日に将棋棋士として初の国民栄誉賞を受賞した羽生善治(1970～, 94年九段)は、選手権獲得歴代1位(99期)・初の全7冠独占達成(96.2.14)・初の永世7冠(十九世[実力制第九代]名人[94～96年3連覇, 03年復位, 08～10年3連覇, 14～15年2連覇, 通算9期]を含む)+名誉NHK杯選手権者称号獲得(17.12.5)等の殊勲が有る。平成最強の彼に対して昭和最強の大山康晴(1923～92, 58年九段)は選手権獲得総数2位(80期), 十五世(実力制第三代)名人(52～56年5連覇, 59～71年13連覇, 通算18期)・永世十段・永世王位・永世棋聖・永世王将の栄冠を持つ。日本独特の盤上遊戯の両巨星は共に国内屈指の西洋将棋強豪であるが、現代の囲碁九段第1号藤沢朋斎も1947年に西洋将棋公開戦で2位を取った事が有る。大山は西洋将棋の普及に熱心な他の2人に対して象棋(中国将棋)の普及に力を入れ、更に囲碁を麻雀と共に趣味とし県代表に2子(強い県なら3～4子)で打つ棋力であった。⁹⁹⁾ 盤上遊戯の親縁性を現す様に藤沢朋斎・木谷實・呉清源は将棋五段の免状を持ち¹⁰⁰⁾, 選手権獲得19期(歴代6位)の米長邦雄は日本棋院から趣味の囲碁の8段を追贈された。米長は『碁敵が泣いて口惜しむ本“将棋”の天才が発見した囲碁必勝の秘訣』(祥伝社, 1985)を刊行し、藤沢秀行と『勝負の極意 なぜ戦いつづけるのか』(クレスト社, 97. 祥伝社文庫[99]では『戦いはこれからだ——人間的魅力の研究』と改題)を共著した。引退後に初めて本格的に始めた囲碁で9年後の2019年元日に6段の免状を得た中原誠は、将棋と思考が違って白黒ははっきりさせてはいけない難しさと面白さにのめり込み、囲碁との二刀流は好影響を与えるから将棋棋士も碁を打った方が良く、自分は現役の時もう一寸早く打っていたら、将棋非専業5段の藤沢秀行みたいに60代でも選手権を取っていたかも知れない、と71歳の6段資格獲得の際に冗談風を交えて語った。¹⁰¹⁾ 主に将棋畑の山田史生が囲碁観戦記も書いたのは読売新聞社の仕事であり、同社第6代(1947～65)「覆面子」(囲碁観戦記者の筆名)の山田虎吉(1903～92, 報道人・囲碁観戦記者・囲碁著述家)を父親に持つ「碁縁」も有る。彼の『扇子と棋士』(南里出版, 2002)に見る将棋界の慣わしは碁界と通じ合うが、漢字文化に根付く日本発の棋界の風物詩も「考える葦」の集中力の問題と関る。

藤沢秀行は『勝負と芸——わが囲碁の道』第6章「勝負か芸か」の第7節「マナーが第一」で、「碁は二人で打つもの。無言のコミュニケーションである。盤上の戦いがいかに激しくても、盤外のことで不快感を与えるようなことがあっては、コミュニケーションそのものが成立しな

くなってしまう」と説く。「石をやたらにジャラジャラさせたり、打とうとして手を引っ込めたり……。プロ、アマに関係なく、つつしみたいものである」という第1の注意事項に続いて扇子の事に触れる。「昔の先生はみな扇子を持っていた。ちょっと大きめの、署名の入った扇子である。私も院生になったとき、さっそく扇子を買い求めた。偉い先生方は対局のとき、必ず扇子を身につけている。それをまねすると、なぜか強くなったような気がしたものである。扇子をかじる先生もいた。対局に熱中すると、上の方の紙のところを知らず知らずのうちにかじり、ついにはボロボロになってしまう。いま考えるとバカバカしい限りだが、そんなくせもまねしたことがあった。影響とはおそろしいものである。(中略) / 冷房のなかった時代は一種の必需品だったが、いまでもなぜか扇子を持つ習慣が残っている。扇子それ自体は何の問題もないけれど、開閉させるときのパチパチという音はえらく気になる。また目の前でパタパタとあおられるのも迷惑である。 / 林海峰君との名人戦のときだったか、対局中に“うるさい”とどなったことがある。パチパチパタパタで思考のリズムを作っているのだろうが、あまり大きな音でやられると、たまったものではない。林君もびっくりしたと思う。すぐに婦人物の音のしない扇子に取り替えてくれたので助かった。」勝負と芸のどちらが大事かを自問自答する章で儀礼第一の趣旨を掲げるのは、昨今の中国棋界で賛嘆される日本の優れた囲碁文化の特徴である儀礼性の現れと言える。日本碁界の礼法の洗練・厳格・徹底ぶりは礼教(儒教)の本家の同業者を上回り、1980年代の中国囲碁の中興で指導の大役を務めた初代棋聖の2点の訓示は、図らずも儒教発・囲碁由来の最古の成語「拳_レ棋_レ不_レ定」「専_レ心致_レ志」と其々関連する。

偉い先生たちの真似で扇子を棋戦の小道具にした修業時代の心理は、昔の本因坊に肖って名前を「秀行」に変えたのと同様に強くなりたい気持であろう。対局中に扇子をボロボロになるまで嚙^{かじ}ってう^{しま}熱中ぶりと言えば先ず木谷實^{うか}が思い^{うか}及び、『現代囲碁大系』第5巻『岩本薫』(本人解説、配^{はい}島道雄^{しまちち}解説、1983)の第16局に証拠が有る。六段時代の日本棋院昭和15年度前期大手合のこの最終局(1940.8.14~15)は、黒3目勝ちで昇段点を獲得し26年5月以来15年ぶりに昇進できた節目の対戦である。先相先で対した相手の木谷七段は時の花形棋士^{はながた}で対局日程はびっしりと詰まっていたが、早くも秒読みに突入し神経の磨り減る寄せ勝負が続いた過程で本領を發揮し個性を表現した。第2譜(30~71)の解説「意表を衝く木谷流」が言うには、「下辺白32のもぐり込みに、黒33のコスミ受け。白は34と開いて寛^{くつろ}ぐ。黒35の置きは眼形を奪って攻めの急所。 / このとき白は下辺を手抜きして、上辺36の二間開き。 / 木谷さんは時折意表を衝く手を放つが、この手抜きには驚いた。(中略) 周辺の変化を読み切ったの居直りは、木谷さんの独壇場であった。嵩^{かさ}にかかるとの無理攻めは、しのがれて甘くなる。 / ところで、昭和十五年度の『大手合週報』は現存するが、この頃のものには消費時間の記載がない。 / 木谷さんは百手前後で早くも秒読みとなる。 / 妙な言い方だが、秒読みの声を聞くと、木谷さんと対局しているという実感が湧いてくるというわけだった。 / 当時は木谷・呉の並立時代で、

両者の実力と実績は他を引き離していた。そして木谷の長考と、呉の早打ちも対照的で、これらも人気を呼んだ要素の一つに挙げることができる。(中略) それにしても、上辺白36の二間ツメを打たれたとき、二時間近く長考された記憶があり、私はその内容がハッキリつかめずに、木谷さんは時折妙なところで考えこむ癖があるので、また例のくせが始まったかと思っていたふしもなきにあらずであった。1区切りして、改めて、木谷さんの読みの深さと、根気とに驚嘆したものであった。」第4譜(102~143)の解説「小わざの応酬」では、木谷は已に秒読みに入り1目の得失を争う寄せ合いだが、長考派は秒読みには強くて動ずる気配を見せなかったとし、中央に打った白108の尖は木谷好みの手厚い構えで、「この形ができ上がると“やあ、旗を持った””とあって喜んだ。コスんでの地模様が、小旗の形に似ているからなのであった」と有る。11時間の持ち時間の内2時間弱も序盤の1手に投入し、自ら早まった秒読みの中で絵に為る様な陣形の出現に歓声を上げたのは、一所懸命に打ち同時に楽しんでいるという高川格が羨んだ木谷の境地の体现である。第6(最終)譜(204~270)の解説「念願を果たす」は戦勝の述懐よりも盛んに相手を礼賛し、「“扇子パチパチ、お茶ガブガブの木谷さん、扇子に嘸みついて、一局を終わる頃には、骨だけとなり、辺り一面、紙クズだらけ、対局相手や、同室の者が、何か言うと、直ぐに反応する。好奇心が人一倍強かった”とは、ある囲碁ライターの木谷像である」と記す。

その素描風の素顔の描写は出典と為る中山典之の『実録囲碁講談』第3話「秒針の轟き」(完本第3話)では、冒頭に「筆者は数百局の碁の記録係をつとめ、数十人の高段者、大家の奮戦を目のあたりにしたが、その人間味のにじみでていることでは、木谷實九段が第一であろう。恐らくは今後、盤上にこのような人を見ることはあるまい」と語る。第1節「一子相伝の珍芸」には若い時からの上記の評判が出ており、愛弟子で娘婿の小林光一までが性格から癖まで彼と似ており、自分と将棋を指す時に5連勝して500円札を巻き上げた後の第6局で、不利な状況下の苦慮の内にその分捕った紙幣を9割も粉々に喰い千切ってしまった、とも紹介している。対戦相手や同室の対局者の言葉に直ぐ反応する件で又、院生などが騒いでいても余り意に介さず、どっと笑い声が起されれば何事ならんと立ち上がって見物に行く、と有る。曰く、人一倍強い好奇心は盤上にも現れ、面白そうな処(難しい局面)に出会うと先の先まで探検したくなる。「幼児が好奇心を燃やすような気持で盤面に対していたのが、わが木谷九段ではあるまいか。」目の前で木谷が鼻血を出して周りが騒いでいるのにも気付かない呉清源と対照的に、木谷は局面と無関係の事柄にも一々神経を使うから確かに人間味に満ち溢れたが、加藤一二三と同じく音に過敏で人工滝を止めさせた事のように集中力は超人的には至らない。

第2節「時計の音」では神経に障る手合時計の「カチ、カチ」に対する木谷實の嫌悪を描く一方、「対局場には、いろいろの雑音がある。たとえば、間断なく響く石の音、形勢の悪い棋士が大げさに嘆く声。誰かが冗談をいい、別の棋士がまぜ返す笑い声。正座している記録係の

足がしびれて、ドタンと引っくり返る音。手合時計の秒を刻む音に比べれば、百千倍も大きいはずである」と矛盾を指摘し、此等の音は人間が碁を打つ為に已む無く発している音で、人間味が有るから一向に気にならないのだろう、と木谷の許容基準を推察する。『将棋名勝負の全秘話全実話』第1章「新世紀の将棋界」第3節「対局者に“うるさいと叱責されたテレビカメラマン”」に、テレビ対局の収録中に撮影技師が別室に居る番組担当責任者の指示に応答する際、小声ながら不用意な笑い声を上げ、対戦中の高橋道雄（1960～，90年九段）が「うるさいな」と発声した、という異例の場面が綴ってある。上司から大目玉を食った失態は「不自然極まりなく、対局者の注意力をそぐ」と書かれたが、木谷の感覚でも対局・棋士に対する配慮・敬意の欠如として寛恕の対象外であろう。扇子をパチパチと扇ぎ冗句をじゃんじゃん飛ばす木谷の文字通りの扇動に由って、賑やかで和気藹々な対局風景は昭和碁界で普及し海外で日本流として知られている。機械嫌いの「精密機械」である彼の盤上・盤外の談笑や神経質は微笑ましいのに、郷に入って郷に従った林海峰の扇子使いが師でもない藤沢秀行に叱られたのは奇妙であるが、双方とも「考える葦」の専心志向で集中したい故に左様な言動を為したのである。

附記 (1) 本稿は囲碁に関心の強い青少年・非日本語話者に理解し安い様に、読み仮名を多く付けている。
 (2) 本稿中の中国の事柄・人物の基本情報は、原則として中国の権威有る文献（主に辞海編輯委員会編、夏征農・陳至立主編『辞海』第6版[上海辞書出版社、2009年]）に依拠し、日本の辞書等の記載と一部異なる（前漢の景帝の生年、曾子の歿年、許慎の生歿年、『孫子兵法』の著者、『説文解字』の成立時期、許慎・韓愈の属性等）。

注（お断り——本文中で文献の基本情報や篇・章・節題等を明記した個所の所載頁は、重複を避ける為に注で示す事を省く。筆者共著の関連論文で出処を明記した記述には、注を略す個所も有る。）

- 1) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』第7版（商務印書館、2016年）の【將近】（[時間や数量が]～に近い。殆ど。間も無く）の用例に、「中国有～四千年的有文字可考的歴史」（中国は4千年近くの文字に由る裏付けが有る歴史を持っている）と有る。
- 2) 「陝西漢陽陵出土中国迄今最早的陶質圍棋棋局」, 新華社2002年3月28日。
- 3) 本稿中の『春秋左氏伝』の訳は、基本的に鎌田正著『春秋左氏伝』（明治書院『新釈漢文大系』第30～32巻）第16版（1993・95・97年）に拠るが、表現・表記を一部変えた処が有る。
- 4) 本稿中の『論語』の訳は、基本的に金谷治訳注『論語』（岩波書店、1963年）に拠るが、表現・表記を一部変えた処が有る。
- 5) 石川九楊『二重言語国家・日本』, 日本放送出版協会、1999年、106・109・111・126・138・141・175頁に関連の論述が有る。
- 6) 棋士の経歴紹介の中の段位は現役時代の最終昇進、退役時・退役後の贈与、歿後の追贈に限る。所属は日本の棋士は日本棋院以外の場合だけ逐一記し、中国・韓国・台湾の場合は単一組織につき初出の処にのみ書く。
- 7) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 上海文化出版社、2016年、58頁。

- 8) 本稿では書籍情報の中の出版社の所在地は首都である場合は略す。
- 9) 聶衛平著・薛至誠整理『我的圍棋之路』([成都] 蜀蓉棋芸出版社, 1987年), 日本語版(藤沢秀行監修・田畑光永訳『聶衛平 私の圍碁の道』, 岩波書店, 1988年) 102頁。
- 10) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 57頁。
- 11) 「伝奇競風流」, 『圍棋天地』(中国圍棋協会・中国体育報業総社, 月2回刊) 2015年第16期(期=号, 8月15日), 16頁; 喬婷「農心零距离——農心杯裁判手記」, 同誌2006年第19期(10月1日), 2~3頁。
- 12) 藤沢秀行『野垂れ死に』(構成・矢部純一), 新潮新書, 2005年, 106, 134~135頁。
- 13) 藤沢秀行『勝負と芸——わが圍碁の道』(秋山賢司記述・編集), 岩波新書, 1990年, 28~30頁。
- 14) 藤沢秀行『野垂れ死に』, 135~136・138頁。
- 15) 藤沢秀行『野垂れ死に』, 101頁。
- 16) 堀田護「山部俊郎 人と歴史」, 『現代圍碁大系 第二十八卷 山部俊郎』(山部俊郎解説, 堀田護執筆, 講談社, 1982年) 285~286頁。
- 17) 『現代圍碁大系 第三十八卷 石田芳夫 下』(石田芳夫解説, 山本有光執筆, 講談社, 1983年), 12頁。『毎日新聞』の報道「“来年は和服で出席したい”/石田新本因坊の就位式」(1971年7月13日夕刊), 「和服姿で就位式/石田本因坊」(1982年8月7日夕刊)には, 号「秀芳」の意味に就いての言及が無い。
- 18) 自由百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』「本因坊」に拠る。撰者・出典・更新日不明の当該項目の引用には躊躇も感じられるが, 電腦網上の同辞書の圍碁分野の記述は信憑性が高いので, 活字媒体の文献が見付からない状況に於いて便宜的に利用しておく。
- 19) 注18に同じ。
- 20) 大橋俊雄「宮下秀洋 孤独と才気」, 『現代圍碁大系 第十卷 前田陳爾 宮下秀洋』(大枝雄介解説, 大橋俊雄執筆, 講談社, 1982年) 281頁。
- 21) 中山典之『昭和圍碁風雲録(上)』, 岩波現代文庫, 2014年, 162頁。
- 22) 藤沢秀行『勝負と芸——わが圍碁の道』, 29頁。
- 23) 『現代圍碁大系 第一卷 明治・大正名棋家 一』(榊原章二・福田正義・中川新之・岩本薫・中村勇次郎解説, 藤井正義執筆, 講談社, 1981年), 172頁。
- 24) 小西泰三「藤沢秀行 人間と碁」, 『現代圍碁大系 第二十六卷 藤沢秀行 上』(藤沢秀行解説, 小西泰三執筆, 講談社, 1980年) 272頁。
- 25) 「新号お披露目/本因坊就位式/300人が祝福」, 『毎日新聞』2007年8月1日。
- 26) 藤沢秀行『碁打ち一代』, 読売新聞社, 1980年, 185頁。
- 27) 中山典之「孤高のひとり旅」, 『現代圍碁大系 第二十五卷 梶原武雄』(梶原武雄解説, 中山典之執筆, 講談社, 1984年) 274頁。
- 28) 村上明「高川格 人と碁」, 『現代圍碁大系 第十八卷 高川格 上』(高川格解説, 村上明執筆, 講談社, 1981年) 285頁。
- 29) 高川秀格『秀格烏鷲うろばなし』, 日本棋院, 1982年, 85頁。
- 30) 諸井憲二「坂田, その人と芸」(『圍碁クラブ』1982年新年号所載の増淵辰子・坂田栄男師弟対談の引用), 『現代圍碁大系 第二十三卷 坂田栄男 下』(坂田栄男解説, 諸井憲二執筆, 講談社, 1982年) 271頁; 諸井憲二「坂田栄男 栄光の軌跡」, 『現代圍碁大系 第二十二卷 坂田栄男 上』(坂田栄男解説, 諸井憲二執筆, 講談社, 1980年) 280頁。
- 31) 橋本宇太郎『圍碁専業五十年』(至誠社, 1972年) 138頁, 『現代圍碁大系 第六卷 橋本宇太郎 上』(橋

- 本宇太郎解説, 志智嘉九郎執筆, 講談社, 1980年) 131頁。
- 32) 「号は“道吾” / 山下本因坊 就位式に 200人」(金沢盛栄), 『毎日新聞』2010年8月10日。
- 33) 金沢盛栄『本因坊 400年 手談見聞録』(毎日新聞社, 2016年)に, 「日海が本因坊算砂を名乗るのは, 1603年と言われている」と有る。『毎日新聞』2018年5月21日「京都」面所載「いざ, 御城碁 / 第73期本因坊戦第2局 / @二条城を前に (中) / ルーツは寂光院」(今西拓人)でも, 「日海は“本因坊に住む碁の強いお坊さん”として知られ, 1603年, 本因坊を名乗った」とされる。
- 34) 「新本因坊劔正が就位」, 『毎日新聞』1977年8月24日。
- 35) 「井山本因坊 号“文裕” / 地元・大阪で就位式」(佐藤直孝), 『毎日新聞』2016年9月10日。
- 36) 「称号は本因坊秀樹」, 『毎日新聞』1976年8月11日夕刊; 「“名に恥じない碁を打ちたい” / 武宮本因坊就位式」, 同1976年8月18日。「返り咲きおめでとう 武宮本因坊就位式」(同1980年9月2日)には, 「秀樹」を踏襲せず「正樹」を号とした理由は報じられていない。
- 37) 中山典之『昭和囲碁風雲録 (下)』(出版年は上巻に同じ), 309~310頁。
- 38) 「井山裕太九段が本当に尊敬する3人の棋士」, 『NHK 囲碁講座』(NHK出版)2014年2月号電子版。
- 39) 注35に同じ。
- 40) 『現代囲碁大系 第五卷 岩本薫』(岩本薫解説, 高橋敬光執筆, 講談社, 1981年), 192頁。
- 41) 「基礎からわかる元号」, 『読売新聞』2019年2月26日。本段落中の元号出典順位も同じ特集記事に出ている。
- 42) 本稿中の『書経』の訳は, 基本的に明治書院『新釈漢文大系』第25・26巻『書経 (上・下)』(其々加藤常賢・小野沢精一著)第5・7版(1993・95年)に拠るが, 表現・表記を一部変えた処が有る。
- 43) 本稿中の『易経』の訳は, 基本的に明治書院『新釈漢文大系』第23・24・63巻『易経 (上・中・下)』(其々今井宇三郎・同・同+堀池信夫・間嶋潤一著)第12・5・初版(同じ2008年)に拠るが, 表現・表記を一部変えた処が有る。
- 44) 「大宝」が自覚的に漢籍典拠を用いた年号の起点であると見る根拠は, 『日本国語大辞典』第2版(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編, 小学館, 全13巻+別巻, 2000~02年)の【大化】**■** **□**の語釈に漢籍典拠が無く, 【大宝】**■**の語釈に「出典は『易経-繫辞下』“天地之大徳曰レ生, 聖人之大宝曰レ位”」と有ることである。猶, 見出し語・説明の「だい-ほう【大宝】(タイホウとも)」とは逆に, 『広辞苑』第7版(新村出編, 岩波書店, 2018年)では「たいほう【大宝】(ダイホウとも)」と為る。
- 45) 本稿中の孟子語録の訳は, 基本的に内野熊一郎著『孟子』(明治書院『新釈漢文大系』第4巻)第46版(1994)に拠るが, 表現・表記を一部変えた処が有る。
- 46) 『毎日新聞』所載観戦記(倉島竹二郎), 中山典之『昭和囲碁風雲録 (上)』330頁引用。
- 47) 中山典之『昭和囲碁風雲録 (下)』, 267~268頁。
- 48) 『日本国語大辞典』第2版の【放心】は, 「〔名〕**①**良心を失うこと。また, ほかのことに迷って本体を失った心。**②**ほかに気をとられて, また何も考えずにぼんやりすること。**③**心配することをやめること。安心。放神。放念」で, **①**には「書経-畢命」「孟子-告子上」の出典が付き, 後の両義は和製語義と為る。『広辞苑』第7版の項にはその**①**は無く, 「**①**ほかの事物に心をうばわれてぼんやりすること。心が身に添わないこと。“一の態” **②**心にかけないこと。安心すること。放念。放神。“どうぞ御下さい”」の両方に例文が有るが, 中国語と同義の**②**は使用頻度が**①**より低いと思われる。一方, 中国最大規模の国語辞書『漢語大詞典』(漢語大詞典編輯委員会編, 羅竹風主編, 全12巻+索引1巻, [上海]漢語大詞典出版社, 1988~94)では, 5つの語義中の**③**「心情安定, 沒有憂慮和牽掛。」

- (心が落ち着いていて、憂いや心配が無い)は、「元紀君祥《趙氏孤児》第二折」(下線は時代・人名・地名等を表す記号)を初めとする出典が付くので、安心・放神・放念の意は和製ではなく中国語が由来と為る。
- 49) 内藤由起子『囲碁の人ってどんなヒト? 観戦記者の棋界漫遊記』, 毎日コミュニケーションズ, 2005年, 206頁。
- 50) 高川秀格『秀格烏鷲うろばなし』, 72頁。
- 51) 中山典之『昭和囲碁風雲録(上)』, 327頁。
- 52) 注38に同じ。
- 53) 関西棋院 H P の「棋士紹介・藤井秀哉」のプロフィールに、「碁を始めたきっかけ 親にむりやり」と有る。
- 54) 「小林光一」, ^{フリー}自由百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。
- 55) 内藤由起子『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』, 水曜社, 2016年, 201頁。
- 56) 「第31期名人戦七番勝負第1局 写真特集」, 朝日新聞 DIGITAL, 2006年9月9日。
- 57) 中国の『漢語大詞典』『漢語大字典』等を基にした『全訳漢辞海』第4版(佐藤進・濱口富士雄編著, 三省堂, 2017年)に参照。
- 58) 内藤由起子『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』, 157頁。
- 59) 吉野潤子「お金持ちの共通点は熱中と読書。たとえばパフェットとビル・ゲーツ」, *cafeglobe* サイト, 2017年6月17日。
- 60) 『ジーニアス英和辞典』第5版(編集主幹=南出康世, 大修館書店, 2014年)等に拠る。
- 61) 張大勇「江南欲戦幾何」・張大勇観戦記「安復当年狂笑」, 『囲碁天地』2016年第2期(1月15日), 8・27・29頁。
- 62) 『毎日新聞』所載観戦記(覆面子=三堀将), 中山典之『昭和囲碁風雲録(上)』220~222頁引用。
- 63) 京野秀夫「黎明期の群像」第1節「鈴木為次郎」(『現代囲碁大系 第三卷 昭和名棋士集一』[岩本薫・田中三七一・鍋島一郎・鈴木五良・窪内秀知・桑原宗久・山部俊郎・吉田陽一・三王裕孝・田中秀春解説, 京野秀夫執筆, 講談社, 1981年] 259頁)等。
- 64) 藤沢秀行『野垂れ死に』, 88頁。
- 65) 藤沢秀行『野垂れ死に』, 91頁。
- 66) 中山典之『昭和囲碁風雲録(上)』, 202~206頁。
- 67) 『現代囲碁大系 第十三卷 関山利一 半田道玄』(関山利夫・小山靖男解説, 山下智道 [関山利一の部]・斎藤謙明 [半田道玄の部], 講談社, 1981年)所収の関山打碁15局の最終局(日本棋院後期大手合, 1942.12.23~24)の解説は、「現役最晩年の作」と題する(134頁)。
- 68) 橋本宇太郎『囲碁専業五十年』, 122~124頁。
- 69) 『現代囲碁大系 第五卷 岩本薫』, 179頁。
- 70) 内藤由起子「木谷實年譜」, 『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』, 236頁。
- 71) 内藤由起子『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』, 65頁。
- 72) 「島村俊廣」, ^{フリー}自由百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。
- 73) 『現代囲碁大系 第三卷 昭和名棋家一』, 202・208頁。
- 74) 京野秀夫「黎明期の群像」第8節「向井一男」, 『現代囲碁大系 第三卷 昭和名棋家一』274~275頁。
- 75) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 121, 55頁。
- 76) 『現代囲碁大系 第五卷 岩本薫』, 200頁。
- 52 (462)

- 77) 中山典之『昭和囲碁風雲録 (下)』, 94 頁。
- 78) 村上海明「高川格 人と碁」, 『現代囲碁大系 第十八卷 高川格 上』 282 頁。
- 79) 高川秀格『秀格烏鷺うろばなし』, 121 頁。
- 80) 「15 歳の藤井棋士が“深夜労働 OK” なワケ / 個人事業主は労働基準法の対象外」(弁護士・佐藤大和), 『プレジデント』(プレジデント社) オンライン 2017 年 10 月 16 日号。
- 81) 『現代囲碁大系 第二十三卷 坂田栄男 上』, 12 頁。
- 82) 高川秀格『秀格烏鷺うろばなし』, 159 頁。
- 83) 三好徹「巨人——呉清源」, 『五人の棋士』(講談社, 1975 年) 8 頁; 堀田護「山部俊郎 人と歴史」, 『現代囲碁大系 第二十八卷 山部俊郎』 287 頁。
- 84) 『現代囲碁大系 第六卷 橋本宇太郎 上』, 178 頁。猶, 本局の場所と為る「五日市・吉見園津脇氏邸」(164 頁) は, 氏名が不完全で地名との区分も為されていない。
- 85) 中山典之『昭和囲碁風雲録 (上)』, 290 頁。
- 86) 呉清源『増補・新装呉清源打碁全集 (全四巻) 第三巻』, 平凡社, 1997 年, 270~273 頁。
- 87) 中山典之『昭和囲碁風雲録 (上)』, 289~290 頁。
- 88) 藤沢秀行『勝負と芸——わが囲碁の道』, 172 頁。
- 89) 『現代囲碁大系 第四十巻 加藤正夫 下』(加藤正夫解説, 秋山賢司執筆), 講談社, 1983 年, 74 頁。
- 90) 高川秀格『秀格烏鷺うろばなし』, 121 頁; 『現代囲碁大系 第十九巻 高川格 下』(高川格解説, 村上海明執筆), 講談社, 1983 年, 275 頁。
- 91) 「这才是我, 小林光一」(本刊記者采訪・整理), 『囲碁天地』 2018 年第 19 期, 5 頁。
- 92) 高川秀格『秀格烏鷺うろばなし』 90 頁の記述では, 「山の上の温泉」と誤記されている。
- 93) 山田史生『将棋名勝負の全秘話全実話』, 講談社 + a 文庫, 2002 年, 155~158 頁。
- 94) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 161, 182~183 頁。
- 95) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 182 頁。
- 96) 『趙治勲』, 自由百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。
- 97) 朱偉『上海灘棋人棋事』, 57~58 頁。
- 98) 高川秀格『秀格烏鷺うろばなし』, 101 頁。
- 99) 大山康晴・呉清源対談「棋道——日本の文化として」(『榎人間讃歌』[榎出版社] 第 21 号, 1977 年 3 月 1 日), 大山康晴『大山康晴全集Ⅲ 記録への挑戦』(毎日コミュニケーションズ, 1991 年), 248 頁。
- 100) 注 99 文献, 247 頁。
- 101) 「中原誠十六世名人, のめり込んだ碁碁の魅力 / “白黒ハッキリさせないのが難しさ”」, 『スポーツ報知』 2019 年 1 月 15 日。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

围棋之源——天授的智斗游戏（一）

自 2016 年人工智能攻克人类顶级棋手起，围棋这一极深奥复杂的智力游戏发生巨变，堪称日本江户、昭和时代及 1988 年以来的国际化时代之后的第 4 大黄金期到来。

本文旨在探求围棋的起源及本源特征，首先注目有文字可考的历史始于《春秋左氏传·襄公二十五年》，视该语源为围棋产生于中国并扎根于汉字文化、儒教文化的有力证据，指出其中“举棋不定”的成语故事启示着围棋要求高度的决断力，及盘上智术与治世、处世术相关。

继而将《孟子·告子章句上》中高手教棋场面由来的“专心致志”，解释作提倡强化对围棋及人生都至关重要的专注力。以当今称雄世界的中国围棋界亦感佩不已的上世纪日本棋手的敬业心、献身精神为例，阐述围棋令众多豪杰竞相倾注全力乃至不惜身命的惊艳魅力及怪异魔力。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

（夏 冰，京都围棋道场教师）